

にーあおーとまた

SeA

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この前のぶつ通し生放送で思いついてしまったので書いてしまった。

2Bに転生して、生きたかつたり、死にたかつたりしながらなんやかんや頑張るお話。
ほとんど原作プレイ前提で書いてるので、Automataやつてない方は、ちょつ
と読みづらいかもしないです。

目

次

ポッドなんか嫌いだ

怒るのはいいけど、頭叩くのはどうか

と思う

いまさら、そんなこと

9Sモデルは優秀なことで有名なんで

す。

A
D : 1 1 9 4 2 5

にーあおーとまた

嫌いな仕事

いつもごめんね。

考えるとつらいから、考えない。

17

わからないよ。

これで18回目

ずっと傍にいますよ。絶対に

なんか思つてたのと違う……。

52

大人しくするの苦手なんですけどね

45 35 24

13 8 1

N i e R : A u t o m a t a

A
D : 1 1 9 4 5 0 3 1 0 5

ポッド、おまえつてやつは

いい作戦だと思ったのに……

難しい事考えるのは任せた！

—

148 139 125

115 104

90 82

75 61

AD：119425 にーあおーとまた

転生という概念がある。それは人生が終わつたのにも関わらず、また新たに人生が始まるこことを指す。

まあ、そういうふた考えがあるというだけで実際にそれがりえるかどうかなんてのは、当然だけど誰も知りはしない。死んでみなければそれを確かめることができないからだ。

だというのに、今の俺の状況はなんなのだろう。

「——そつちはどんな感じですか？」

目が覚めたと思つたら、知らない場所にいて。

知らない人が來たと思つたら、わけのわからぬ話をされて。

「いい感じですか？ それとも悪い感じですか？」

なにも理解できない筈なのに、気づいたら頭の中に答えが浮かび、その答えを口にしていた。

「やつぱり結構釣ります？」

その場所の名前。

その場所の意味。

目の前の人への立場。

自分が生まれた理由。

自分の立場。

そして――自分がやるべきこと。

「あの、もしもーし?」

本来の俺の思考ではありえない速度で問い合わせが生まれ、頭の奥から答えが返ってくる。

「もしもーし? 聞こえますかー?」

そしてようやく理解した。

俺は死んだのだと、交通事故に遭い命を落としたのだと。

「2B! 大丈夫ですか!? 返事してください!」

『2B』

そのたつた2文字の単語が今の俺の名前。

「……9S。うるさい」

NieR:Automataというゲームがある。そのゲームの主人公の一人は白髪で黒い衣装を身に纏つたかわいい女の子のアンドロイド兵士で、名前を『2B』という。

つまり、今の俺のだ。

自分が2Bだと自覚した瞬間「あつ、終わつた」と思った。ゲームでは最終的にハツピーエンドで終わつたが、それはあくまでも『2B』だつたからで、俺のようなんちゃつて2Bではなかつたからだ。

「2Bがなにも返事してくれないからちよつと心配したんですよ。もう……」

ゲームではエンディングが全部で26種類存在するが、アジを食べたり、散歩に行つたりしたら発生するネタエンディングが大半で、基本的にはその内の5つのエンディングが正しいエンディングと言えるものだ。だが、もし仮にそんなネタエンディングをこの世界で迎えてしまえば最悪地球が滅びることになる。

つまり何が言いたいかというと、俺のせいで世界が滅亡する可能性があるということだ。

「魚が逃げるから、静かにして」

だから考えた。どうすればいいのかを。

だから考えた。何を成せばいいのかを。

そして答えは出た。

「本当に2Bは、釣りをしてる時は真剣ですね」
うん。無理だ。諦めるか。

まあ結論を言うとそういうことになつた。そもそもただの一般人にすぎなかつた俺が、最新鋭のアンドロイドの肉体と頭脳を手に入れたところで、所詮は俺に過ぎない以上どうにもできないのは目に見えている。さすがにいきなり全部を捨てて好き勝手に行動する気は無いし、多少は頑張るつもりではあるけど……。

まあ、あまり結果は変わらないだろう。

「9S。その言い方だとまるで私が任務時に真剣ではないみたいに聞こえるけど」

さつきは世界が滅亡するとか言つたが、正確には付近の部隊が壊滅するとか、村が滅びるとかの簡単な描写しかなかつたし、世界が滅びるまでは言い過ぎかなつてちよつと自分でも思つたし、多分大丈夫だろう。

「そうは言つてませんけど。なんというか2Bは任務の時もすごい真面目に取り組んでますけど、釣りをしてる時はそれ以上に集中しているというか、なんというか……」

なので今はゲーム本編開始まで約3年ある時間を有効に使おうと思つて、任務をこなしつつ、自分のやりたいことをちょこちょことやって過ごしてた。

「……9S」

一応B型、戦闘モデルという名目なので、基本的な任務は確認された敵の単騎撃破とか、敵基地の単騎撃破とか、防衛線構築のための単騎での敵中枢ユニットの撃破とか……。

いくら最新鋭のアンドロイドだからって無茶させすぎな気がするんだけど、任務だからやるしかないし。

「いやいや、別に2Bを侮辱してるとか、非難してるとかではないんですよ！　ただそういう風に感じることがたまにあるというだけで、決して2Bを悪く言いたいわけではなくてですね！」

そんな物騒な任務の合間に近場で釣りをしたり、オペレーターにプレゼントする花の画像データを撮つたり、なんてことをして過ごしてきた。

「――機械生命体はいつでも倒せるけど、魚は今しか釣れない」

まあ、今回は珍しく2機での合同任務で、内容も放棄された敵基地周辺の調査なんて簡単な任務だったので、結構好き勝手にやつてる。

「……は？」

一緒に行動してるアンドロイドの名前は9S。俺のような戦闘モデルとは違い、調査や偵察といったものを得意とするスキナータイプだ。これまでも何度も何度か合同で任務を受けたことがあり気心も知れていますので、とてもやりやすい相手もある。

「魚は機械生命体と違つて同じ個体は存在しないし、同じ名称でも大きさや動きも違つたりしている。だから相手に失礼のないように集中して全力で釣り揚げようと気を張る必要がある。つまり私は普段以上に真面目に対応しなければいけない。そういうこ

と。わかつた？ 9S』

知的好奇心が旺盛で、気になることがあつたら周囲も気にせずにずっと調べて回つたりする。そのおかげか合同任務の時なんかは、9Sと一緒にすると、気づいたらいつの間にか9Sが勝手に調査を終わらせていて、自分ではなにもせずに任務が終わるなんてこともあるぐらいには知りたがりで優秀だ。

「……よくわかりました。2Bつて結構バカなんですね」
だからこそ思う。残念だと。

「……今までわからなかつたの？」 9S

周りをよく見てるし、他人の機微に敏感だし、気が利くし、こつちが言う前に行動を先読みして動いてくれるし、こうやつて任務中に遊んでいても任務に支障がないと判断したらなにも言わず一緒に遊んだりしてくれるし、任務上、単独での行動が多いからか合同任務の時は犬みたいて懷いてくるし。

本人には失礼かもしれないが、ちょっとかわいいやつだ。

「ええ。今さらわかりましたよ。まつたく……。それじゃあ僕はそろそろB地点の偵察に行つてきますね。僕は釣りにはそこまで真剣になれませんし。なにも無いとは思いますが、敵や未発見の機械生命体の痕跡などを発見したら連絡を入れますね」
だからこそ思う。いやだな、と。

「了解。問題ないと思うけど気をつけて」

今回の君は気付いているんだろうか。それとも気付いていないんだろうか。9Sは隠し事をするのが得意だからいつもわからぬいけど、できたら気付いてほしい。

「まつたく、そう言うならついて来てくださいよ……。あまり夢中になりすぎないで2BもA地点での調査お願ひしますね？——それじゃあ、C地点で1時間後に合流しよう。ではあとで、2B」

合流地点に行つたらそこにいないでほしい。

合流地点に行つたらそこにいてほしい。

「うん。またあとで、9S」

逃げてほしい。生きてほしい。

戦つてほしい。勝つてほしい。

「——推奨：司令部からの極秘任務の達成」

そんな身勝手で浅ましい俺を。
いつの日か。

「…………了解」

——殺してほしい。

嫌いな仕事

そもそもその話、俺はあまりこの仕事が好きじゃない。

というか嫌いだ。大嫌いだ。

当たり前なんだが、元々ただの一般人だつたやつがいきなりエイリアンが作った兵器と命を懸けて戦えとか、一緒に戦う仲間を殺せ。なんて仕事を好きでやってるやつなんてのは普通はいないだろう。もしかしたらどつかにはいるのかもしれないが。

つまりなにが言いたいかというと今の俺はその大嫌いなお仕事中。

具体的に言えば単騎での敵機械生命体の撃破だ。

事の発端は2週間前、とある地域のレジスタンス部隊の反応が丸ごと消失したことから始まつた。

最初は通信機材のトラブルが疑われたが、時が経つごとにその付近のアンドロイド達の反応が消失していくことから、機械生命体による攻撃を受けていると司令部は判断。

ヨルハ司令部は、B型D型S型の3機での任務を発令し現地の調査、あるいは撃破を命じ、その結果原因は敵の大型機械生命体によるものだつたと判明し、同時に撃破に失敗したのが2日前。

そして本来の仕事を終えて精神的に休息を取っていた俺に、その大型機械生命体の撃破が命じられたのが昨日。

そして今俺は、その大型機械生命体と一人で戦いを挑もうとしている。

「なんで私は一人あんなのと戦おうとしているんだ……」

「回答：司令部より単騎での敵機械生命体の撃破を命じられたため」

「前回の作戦時は、3人で戦つて勝てなかつたと聞いたけど？」

なんで3人で戦つて倒せなかつたやつ相手に、俺は1人で戦わなきやいけないんだよ。

司令部も頭おかしいんじゃないか。

「回答・調査を担当した22B、3D、11Sはロールアウト直後で実践経験などといつたデータが不足していたことにより、敵兵器の撃破までには至らなかつたと見られる」

「それでも基本、データはロールアウト直後でもインストールされているはず。新人3人で無理だつたとしても、次の戦闘ではせめて同程度の人数で行くべきじゃないの？」

「回答・司令部から、当機の随行支援対象である2Bの戦闘能力は同時期に稼働開始した4B、8B、14B、24Bなどと比べて撃破率、任務達成率が著しく高く、被撃墜数もいまだないことから、他のB型と比較した場合約4倍程度の戦闘能力を所持している

と認識されている」

……は？

いや待て、確かに、俺はまだ死んだらこの『俺』の記憶がどうなるかわからないから、いつも死に物狂いで頑張ってきたさ。おかげでまだ一回もやられてないし、確かに任務も一度も失敗してはいないけど。

でも、さすがに4倍はおかしくないか？ それ、俺一人で単純にB型4機分つてことになるんだけど。

「……確かに、私は任務を失敗した覚えはない。けど、だからといってその評価はおかしい」

「疑問：隨行支援対象である2Bの自己認識能力。稼働してからの5ヶ月での戦闘任務125回、防衛任務42回、威力偵察任務13回。敵機械生命体の撃破数12702体。以上の記録が他のアンドロイドとの合同任務を除いての当機隨行支援対象である2Bの記録である」

確かにそう言われると俺の戦闘力やっぱそうだけども。

でも俺そんなに頑張ってたつけ？ 誰かが数を間違えたとかじやなくて？

「……その記録本当？」

「回答：この記録は当機、ポッド042によるもの」

お前かい！

確かにずっと一緒にいたし、戦つてきたけども。だつたらなおさら俺の力がそんなにすごくないのはお前が一番知ってる筈なんだけど。

遠距離攻撃で敵の数を大量に減らしたのはポツドの力なんだし。

「疑問：随行支援対象である2Bは当機による記録を信用していない？」

そうじやないけどさー。

「信用してないわけはない。今までポツドが虚偽報告をしたことなんて、一度だつてないもの。……ただ、そこまで活躍した覚えがないだけ」

そうそう。この5ヶ月ずっと戦つてきたけど、余裕なんて一度もなかつたし。好き勝手に生きてやるなんて考えてたけど、戦わないなんて選択肢は無かつたから無我夢中で戦つて、でも戦闘の時はいつも怯えて、敵に近づくのも怖いから遠距離からひたすらポツドで攻撃してばっかりで。それか周りの建物壊して敵を巻き込むとか、川を堰き止めて敵がきたら一気に押し流すとか。そんな無茶苦茶な戦いばっかりしてただけで、一応ほかのアンドロイドでもできるようなことしかしてなかつた筈なんだけどな……。「……なんで一人なのにはわかつた。だからといつて、アレと正面から戦うつもりはない。とりあえず敵の行動を阻害したり、罠をかけられる場所に誘導して少しでも有利な状況を作りたい。ポツド、前回作戦時の付近の調査データを見せて」

「了解」

ほんといやな仕事だ。無茶ぶりばかりでいつも疲れる。

まあ、それでも俺の本来の仕事と比べたら精神的にすっごく楽だから、そういう意味ではこういう仕事は好きなのかもしれない。

だからといって、嫌いな仕事なのにはかわらないけど。

いつもごめんね。

今日は久しぶりにのんびりできる日だ。

正確には、新たに建てる前線基地の建設予定地付近の機械生命体の駆除の任務ではあるが、基本的には与えられたエリア内にいる敵を一定期間の間、侵入されないように倒せばいいだけなので楽な任務だ。

敵が来なければその間のんびりとしていても誰にも文句は言われないから、この手の任務は好きな部類だ。なにより楽だし。

「ポッド、ここから3時の方角を向いて画像データを撮つて。あと映像データも」「了解」

「その次は9時。それが終わつたら向こうにあつた花畠も撮りに行くから」「了解」

なので、空いた時間で好きなことができる。

ただ残念なことに俺が任されたエリア内には水場がない。基地予定地を挟んで反対にある他のB型が担当するエリアだつたなら川があるから釣りができるのに……。出発の時にそつちがいいつて司令に言つたら、絶対ダメだつて言われたし……。

別にいいじやん。誰がどこ担当しても大して変わらないんだからさー。ちょっと没頭しすぎちゃうだけだつてのに。

「疑問：任務に関係のない草木の画像データの撮影」

?

疑問もなにも、

「いつもと同じ。任務が終わつたら60に渡しに行く」

「疑問：オペレーター60に画像データを譲渡する必要性」

今さらというか、一番最初のときにも聞かれた気がしたけど。

「前に説明した通り。60に対しての普段の感謝の気持ちとして彼女の好きそうな画像を贈つてているだけ。いつも迷惑をかけてしまつてはいるから、その謝罪も少しは入つてるけど」

任務はこなしてるけど、眞面目にやつてるかどうかと言われたらやつてないしな俺。司令官に呼び出されると、他のオペレーター達に今度はなにしたんだつて目で見られし。

そんな俺を担当してる60も、変な目で見られてるかもしれないから、こうやつて許してくれーつて気持ちと感謝の気持ちを込めて写真撮つてるわけだし。

「……疑問：随行支援対象である2Bの自己管理能力」

「……なにが言いたい？」

「回答：迷惑をかけてる自覚があつたのか」

「この野郎言いやがるな。」

「任務に支障をきたしてはいない」

「警告・行き過ぎた迷惑行為によつて、司令部より行われる自我データのフォーマットの可能性」

「それは……」

確かに今まで、そんなことまで考えてはいなかつたけど。

任務は問題なくこなしてるからいいかなーって思つてたし、司令官にたまに小言を言われるくらいで、はつきり禁止とか言われてないから大丈夫だと思つてたんだけど。

やつぱまずいのかな。

「予測：ヨルハ機体2Bの能力を考えると、現段階でのフォーマットの可能性は低い」

「えつ……」

「おい。さつきと言つてることが違うぞ。」

「現状のように作戦行動に支障をきたさず、他の部隊員に影響を及ぼさない範囲なら問題はなく。問題行為が発展し、作戦行動に悪影響を与えるなどといった敵に利するような行動をとらない限りは、ヨルハ機体2Bの任務達成能力を考慮すると自我データの

「フォーマットは行われないと判断する」

「……要約すると？」

「回答：今ままなら問題ない」

「なんだよ、ビビらすなよな。もう。

「よかつた。もう少しで自肅するところだつた。ありがとう。ポツド」

「……要求：ヨルハ機体2Bの任務中の問題行動の停止」

「ダメって言われたらやりたくなるから、もつと言つて」

「……推奨：花畠の撮影」

おお、忘れるところだつた。60に送る写真の話だつたな。やっぱポツドは頼りになるな。

60はいつも自室で泣いてるときに抱きしめに来てくれるから、やっぱお礼はしないとな。

本当は写真だけじゃなくて花そのものとか渡したいけど、さすがに衛星軌道上にまでは持つていけないしな。釣りも釣つたら写真とつて、そのあとリリースしてるし。

花は無理でも、花の匂いとか嗅がせてあげたいんだけどな。バンカーって香水とか作れないんだろうか。

考えるとつらいから、考えない。

呼び出しを受けた。

60に写真を渡して隣に座つて一緒に見ながらその花がどんな感触で、どんな匂いがするのか話していた最中に。

司令官から。

気分がガクッと落ちていくのを感じる。吐くものもないのに吐き気がする。

隣にいた60がこつちを気遣うような、優しい表情でギュッと抱きしめてくれた。

60マジ女神。

少しだけだが、気分が楽になつた気がした。

司令室に向かう。

ゲームでは司令官がいるのは司令室の真ん中だつたが、実際はずつとそこにいるわけじゃない。私室にいることだつてあるし、エネルギーを補給するために席を離れることだつてある。

そして今回みたいな時は、司令室から繋がつてゐる奥の部屋。

ゲームには登場しなかつた作戦会議室と呼ばれる部屋がある。実際に会議で使つた

ことはないらしいけど。

基本的に中規模、大規模な作戦は司令部と他の部隊とで考えるらしいけど、オペレーターは権限がないから口出しできないうらいし、実質、ヨルハ部隊単独での作戦は、司令官一人で考へてるんじやないかとか言われてる。さすがにそれはないだろうけど。

それはともかく、6〇が言うには、会議室が使用された中で会議をした記録なんてのは今のことろないうらいし。

だから、今まであの部屋が使われたのは司令官からの呼び出しの時ぐらいで、あの部屋はオペレーターの間では、「説教部屋」と呼ばれてるそな。

そしてその説教部屋に呼び出された数が一番多いアンドロイドというのが、

「失礼します」

俺だ。まあヨルハのアンドロイドは普段ふざけてても、任務には忠実な個体が多いからあまり他のやつは呼ばれないらしい。

司令室に入り、オペレーターの怪訝な目を受けながら、説教部屋の扉を潜る。また6〇に写真持つてかないとな。月の涙ぜんぜん見つからないんだよな。

「来たか。 2B」

「はい。 司令官」

ヨルハ部隊司令官。名前をホワイト。名前で呼ばれてるところは見たことないけど。

ゲームだつたら1週目でいい上官だなつてなり、2週目でマジかつてなり、3週目で
フアツ!? つてなる。何言つてるかわからんねえな。

舞台の過去編では一番印象が変わつたキャラだつたから、よく覚えてる。

「予想していたと思うが、任務だ」

「……機械生命体相手のですか?」

「いいや……。君の本来の、2Eとしての仕事だ」

知つてた。

くそつたれ。最悪な気分だ。こんな感情を司令官に向けたところで意味なんてないけど、最悪に気分が悪い。

というかなにより早すぎる。前回は5日前だぞ。いくらなんでも早すぎんだろう。もう辿り着いたのかよ。チクショウ。アイツ本当に優秀すぎんだろ。くそ。

「とは言うが、正確にはいつもとは違う仕事だ」

「それは、どういう?」

今回のアイツが無茶苦茶すぎるぐらい有能で、もう逃げだして足取りを追えないとか?

だとしたら正直すげえ嬉しいんだけど。そのままどこかで幸せに暮らしてほしい。

「対象が違う」

……対象が、違う？
あいつじゃないの？

「ある意味では、いつもより難易度が高い任務となるだろう。失敗する可能性も高い」
待つた。

俺がやるような相手で、いつものやつとは違くて、失敗、つまり死ぬかもしれない相手って、まさかとは思うが。

「その対象の名前は？」

「A2。ヨルハのプロトタイプ部隊における、最後の生き残りだ」

最悪だ。最悪すぎる。もうマジ無理。

どうしろってんだよチクショウ。

「彼女は以前の作戦時に敵機械生命体に対して機密情報の漏洩を行った可能性が高く、その作戦で他のヨルハ部隊員の命を奪い、そのまま脱走。敵に利した裏切り者でもある。このような存在は、一刻も早く処理しなければならない」

プロトタイプ。最後の生き残り。裏切り者。

これだけでもうなんかヤバいよね。強キャラ臭すぎいするよね。

『A2』。ゲーム出てくる3人目の主人公。

まさかのゲーム後半からじゃないと動かせないし、ゲームの展開もヤバくてそれどこ

ろじやないし、過去も壮絶だし。ていうか本当に過去が壮絶過ぎてマジ泣ける。ゲームで知つて涙目になつて、朗読劇で泣いて、舞台で号泣したわ。

「A2……。裏切り者、ですか」

「そうだ。我々は断じてA2を許してはならない」

どの口で言つているんだというか、言わされてるんだろうというか。

最近気付いたのは司令官は嘘の命令をする時に、体を大きく動かす癖があるということ。速めに直したほうがいいと思う。

とりあえず、自分も騙せない嘘を吐くのは辛いからやめたほうがいい。俺もよくなるし。どうせ俺が部屋から出た後で一人になつたら、すげえ苦しくなるだけなのに。

教えて上げたほうがいいのかな。

そうだ。まとめて全部教えてやればいいんだ。司令官も知らないヨルハの秘密も、機械生命体の秘密も。

俺と違つて頭もいいから、きっと、全部うまくいくようなことを思いついてくれるかもしれない。

うん。いいかもしない。じやないとあと数年もしたらヨルハもバンカーもなくなつて、全部終わつてしまふんだから。うん。思いつきにしてはいいかもしない。

人類会議なんて無視しちまえばいいんだ。そう言つてやれば司令官もきっと吹っ切

れて、自分のやりたいことを好きなように――

やめよう。

これ以上は意味のない思考だ。そんなこと言つたつて、信じてくれるわけはない。そ
んなのはただのご都合主義だ。

俺にはなにもできないつて、諦めるつて決めたんだから。考えるのはやめよう。
ただ俺は俺のために、好きなように残りの時間を過ごすつて、決めたんだから。無力
でバカな俺には、なにもできっこないんだから……。

「……2B？　どうした？　大丈夫か？」

「……はい。いえ、大丈夫です。いつもの任務と違つて少し驚いていただけです。任務
内容は把握しました。今すぐ向かうべきですか？」

「ああ、素早い対処が求められている」

「了解しました。ヨルハ機体A2の処分に向かいます」

「頼んだ。詳しい情報はこのチップに入っている。十分に気をつけて行つてくれ」

「……はい」

とりあえず急いで準備しないとな。消耗品を補充して、回復を多めにして、現地に着
く前にA2の情報も読み込まないといけないし。急がないとな。さっさとここから出

て――

——ああ、待つた。出る前にちゃんと挨拶はしないと。どんなに俺が気安く思って
いても相手は上官なんだし、なにより礼儀は大事だしな。
たとえバカでも、それぐらいはわかってる。

では司令官。

「人類に、栄光あれ」

「人類に、栄光あれ」

いつてきます。

わからないよ。

「ポツド、アップロードしてくれた?」

「肯定・既にヨルハ機体2Bの自我データ及び、記憶データのアップロードは完了している」

「そう……。ならない。どつちにいる?」

「ブラックボックス反応を北西から感知」

「わかつた。行こう」

ヨルハの裏切り者。A2の処分にやつてきた。

A2がどんなやつか知つてゐるくせに、そんなことを言われて俺はやつてきた。

唐突だが、ここで一旦俺のスタンスを見返そうと思う。最近ちょっとぶれてきた感じもあるし。

基本的に原作改変は自分の意思でやらない。

なので、原作をできる限りなぞれるように努力する。改変したところで、悪化する未來しか想像できないから。

だけど原作以外のところでは、自分の好きなようにする。

原作をなぞるつてことは、俺も死ぬつてことだから。死にたくはないけど、どう考
ても無理だし、ならせめて楽しく生きてから死にたい。
死にたくないなら、なんとか頑張つて改變しろつて？

色々考えてはみたけど結局のとこ、バンカーをいつでも墜とせるようなやつ相手に、
気付かれないように暗躍するなんてことをこの俺ができるわけないから無理。諦めて
死ぬ。

なので俺のスタンスは大きく分けると、

『原作守つて楽しく生きる』

この2つになる。我ながら、わかりやすくていいな。

つまり、なにが言いたいかつていうと、――A2は殺さない。

当たり前だけどメインキャラを殺すなんてしたら、原作改變どころか原作破壊になつ
てしまふしな。

なので今回の任務で俺はA2を殺さず、なおかつ俺も生き残ることを目標としている。
理想は俺にA2が負けると思つて逃げてくれことだけど。問題は、A2がそこまで危機感を感じるぐらいに戦うことができるかつてこと。
すつげえ難しいのはわかつてるが、なんとかするしかない。
そして俺は常々疑問に思つてゐることがある。

それは、俺は死んだらどうなるんだろうか、というものだ。

正確には、この自我データやら記憶データやらが入つてゐる2Bの義体の機能が停止したら、データの巻き戻しで再起動した際に『俺』は巻き戻るのかどうかって話だ。

思いつく可能性は2つ。

1つは、消える。

次に2Bが起動した時には『俺』の意識はなく、眞面目で誠実な2Bになつてゐる可能性。

1つは、巻き戻る。

再起動しても任務に眞面目で不眞面目で、バカな『俺』の意識を宿したままの可能性。俺はどつちがいいかというと…………どうなんだろうな。

消えるなら、それはそれで楽だろうし。巻き戻るとしても、どうせ数年後にはバンカーもなくなつていざれ巻き戻れずに死ぬんだし。結局のところ早いか遅いかの違いでしかないから、どつちでもいいのかな。

「対象の予測位置は？」

「周辺の破壊された機械生命体の位置から予測するに、北北西に7kmの地点にいると推測される」

「なんとか先回りしたい。できそう？」

殺すつもりはないけどそこそこ頑張つて戦つたアピールはしないといけないし、念のため罠とか仕掛けたいから先回りしたいんだけど。

「了解：進行ルートを表示。マップにマーク」

さすが、ポッド。頼りになる。

さて、急ごうか。

「ヒット・ゴミ」

「……」

「……」

「……」

「ヒット・ゴミ」

「……」

「……」

「……」

「報告・新鮮」

「……よし」

よつしや。結構な大物だな。粘つたかいがあつたな。

「……推奨・任務の達成」

ん？ ああ、そうか。来たのか。

つてことは後ろ向いたら——いるな。なんか口開いてポカーンとしてるけど。かわいい。

やっぱ二号モーデルって美人だな。鏡見ていつも思うわ。ポツドに今釣れた魚を撮影させてリリースしてつと。

「オマエは……」

「ヨルハ試作機アタッカー二号、通称A2で間違いない？」

わかつてるけどね。一応言わないといけないし。

「私と同じ顔……二号、モーデル……」

「そう。私はあなたのデータから新たに作られたヨルハ機体」

だからホクロの位置だつて同じなんだぜ。

「A2、貴方には機密情報漏洩及び、機密情報管理不全による処刑命令が出ている。私は2E、二号E型。普段は2Bだけど、今はそう呼んで」

「……コードネームが二つ？」

「いつもはB型。バトラータイプつてことにしてるけど。本来の型番はE型。エクス

キューショナータイプ」

「処刑……タイプ。そんなものが……」

そう。ヨルハが正式稼働する際に新たに作られたアンドロイドタイプ。敵ではなく仲間を殺す処刑人。嫌だと叫んでも、痛いと喚いても、苦しいと泣いても、死にたくないと願つても、仲間を容赦なく殺すくそつたれ。

それが俺。

「A2。義体の機能を停止して機体制御を渡しなさい。さもなくば、貴方を破壊することになる」

マジくそ。ほんとくそ。何様だよバカ野郎。

焚きつけるためとはいへ、本当に殺したくなるぐらい自分に腹が立つ。

「フツ……フフフツ。どうか。司令部はそう決めたのか。自分たちの犯した罪を隠蔽するために、わざわざ私と同じ顔のヨルハを作つて殺しに来させた? フツ……フフフツ」

「……A2」

「そうか……。オマエたちが私を殺そうとするのなら。オマエたちが真実を隠すと言ふのなら」

そうだな。俺が君を殺さないと思つていても、ここに来た時点では俺は君の敵だ。

「いいだろう。私も容赦はしない」

当然だ。君にはそうする権利がある。君にはそうする自由がある。

「機械生命体も、バンカーも、司令部も、月面の人類会議も——」

怖くて、辛くて、死ぬかもしれないけど、俺が2Bだつていうなら、やらなくちゃいけない。

「——全て殺してやる」

さあ、正念場だ。

あれから何時間経つんだろう。

今のは昼の場所は昼、夜の場所は夜つて固定されちゃつたから、何時間経つても昼夜が一切変わらないからちちゃんと時計とか見ないとわかんないんだよな。不便だよなー。

なんて現実逃避してる場合じゃないんだけどさ。

右腕は肘から先が斬り飛ばされて、左腕は肩から折られた。下半身は腰から下の感覚が無い、センサーが逝かれたのかかもしれない。なんてつたつて胸に思いつきり剣突き刺

されてるし。

やっぱ甘かったんだろう。ポツドに俺は強いみたいなこと言われてたから調子に乗つてたんだろうな。単純だしな俺。

つていうかA2強すぎだろ。落とし穴は足が沈む前に通過するし、落石はあつさり躱すし、森の中だつてのに大剣を当たり前のように振り回すし。俺だつたら木にぶつけると思つたから格闘装備で行つたのに。

なによりBモードがやばい。ポツドの射撃すら振り切る速度出せるつてヤバいだろ。鍔迫り合いに持ち込もうとしたら1秒も持たないしさ。相当消耗するからだろうけど最後の十分くらいしか使われなかつたし。というか使われるまでは拮抗してたのに使われた瞬間圧倒されるんだからもうどうしろつて感じ。それまでの数時間はなんだつたんだよ。アニメとかだつたら最初から使えつて視聴者に言われるやつだぞ。

途中からというか、むしろ最初から手加減なんてできるレベルじやなかつた。頑張つたけど、小さい傷を作るぐらいしか攻撃できなかつたな。ポツドはああいけど、やっぱ俺はそんな強くないつてのがよく分かつた。

まあ分かつたどこで、それを活かせるのかどうかわからないけど。もう死ぬし。

「……え、…どう……」

「……」

「ボ、ドは……3きあ、る…から。ぜんぶ…こわ……ない、と」

「……オマエは」

「び、めんね」

これから大変だうしな。最期にアドバイスぐらいはしとかねえと。

ああ、チクショウ。なんでこうなつてんだよチクショウ。

確かに消えたいつて思つたよ。早く死にたいつて思つてたよ。それなのに、
痛いよ。

苦しいよ。

嫌だよ。

死にたくないよ。

なんでこんな気持ちになるんだ。望んでいたはずなのに、願つていたはずなのに。

なんでこんなに生きていたいんだ。

こんな苦しいのに、笑えるわけがない。

こんなに辛いのに、笑えるわけがない。

同じ状況になつたつてのにわからない。本当にわからない。

なんで、なんで、こんなにつらいのに、苦しいのに。

なんでお前は、最期に、あんな風に笑つてられたんだよ。

理解できない。全くもつて理解できない。

わからねえよ。

俺には、わからねえよ。

「ナイ……ン、ズ」

はて……？ ここは――

「――私の部屋？」

「肯定」

俺はA2の処分命令を受けたんじやなかつたつけか？ なんで気づいたら部屋にいるんだ？

「……ポツド？」

「ヨルハ機体2Bは、360秒前に新規義体に自我データのインストールが完了した」「つまり私は」

A2と戦つて死んだのか。そして『俺』ごと巻き戻つたわけだ。

結果は、可能性の二つ目だつたと。

つまり俺はあと3年は生きないといけないってことか。長いような短いような。

「A2は殺せたの？」

「否定：A2のブラックボックス反応はいまだ健在」

「そう…」

なら、大丈夫だな。原作は守れたと思つてよさそうだ。

なんか一安心したら、おなか空いてきたな。胃袋ないけど。

「6〇で和んでこよう」

とりあえず、次の任務まではのんびりするかな。

これで18回目

「……そんなに気になるの？」

「それはそうですよ。あんな大きなサイズの個体見たことないですし」

「……そうだけど。他より大きいだけでしょ？」

「だけって、十分な違いじゃないですか。他の個体と食べてるものが違うのか、はたまた生活環境が違うのか。すごく興味が湧いてきますね」

「……ただの大きいだけのイノシシに？」

「大きいだけのイノシシに、です」

「そう……。わかつた。昨日は私の釣りに付き合つてもらつたから、今日は9Sに付き合う

「本ですか!? 嬉しいなあ。普段は一人ですから、こうやつて誰かと時間を共有するのつてすごく楽しいです。ありがとうございます。2B」

そう言われたのはこれで18回目だよ9S。

君は知らないだろけどさ。

いえーい。みんなーみつてるー?

今回の任務は楽しい楽しい現地調査だぜー。S型との合同任務だぜー。羨ましいだろー？

気持ち悪い。吐き気がする。

9Sと一緒にいると楽しいと、そして嬉しいと思つてる自分がいるのを自覚する。あれだけ殺してゐるのに白々しく笑える俺がいて、本当に自分のことが嫌いになる。

今回は、9Sがヨルハという存在自体に興味を持ち始めたという疑惑がある。つて段階での合同任務だ。まだ機密に触れた形跡はないので疑いだけだ。なんとかこの任務中に他のことに意識を持つていくことができれば、もつと時間を稼げるはずだ。

今回のインターバルはいつもと比べたら長かつたし、もう少し延ばせるようになんとか頑張ろうと思う。

原作改変じゃないかって？ 逸らしても結局は調べちゃうだろうし、ただの時間稼ぎにしかならないのは今までの経験上わかつてゐるから、改変とまではいかないはずだから大丈夫だと思う。

9S専門家の俺を信じろ。

……うん。自分で言つてて殴りたくなつてくるな。
——ちよつ、まつ

「……ん？」

焦つた声が聞こえて、9Sの方に意識を戻したら9Sが空を飛んでた。
あいつ飛行ユニット無しで飛べたのか。さすがだな。

——じゃなくて、なんでそうなった!?

「9S!?」

とにかく受け止めないと。俺とかと違つて戦闘を主目的とした設計をされてるわけ
じゃないんだから、耐久性能もそこまで高くないし。

「2B、前!!」

なんだ? つて、ちょっと、おまつ——

「イノシシ!?」

突っ込んできたから上に跳んで回避してかーらーの、9Sをキヤツチ。

咄嗟だつたけど、できてよかつた。地味にギリギリだつたな。

「ごめん。ありがとう。2B」

「礼はいらない。それよりあれは……」

「……いや、その、気になつたから近くで他の個体の画像データと比較してみたり、直接
触つて確かめてみたら気に障つたみたいで、まさか原生生物に空へ吹つ飛ばされること
になるとは思わなかつたよ……」

本当だよ。まさかそんなことになるとは思わなかつたわ。

好奇心旺盛なのは重々承知していたけど、なにやつてんだよ。もう。
ところでさつきからずつとイノシシがこつちを睨んだままなんだけど。

「……9S」

「あー、えつと」

「……お先に」

「えっ！ ちよつ、2B!? 置いてかないでよ！」

このあと滅茶苦茶追い回された。

なんで、どうして、まだ、だつて、

「——どうして、なんでなの9S」

「……どう、してもなにも、これが君の任務……だろう？」

「だつて！ 君はまだ情報侵犯はしていないはずだつ！ そんな連絡は届いてない！」

「……そうだね。まだハッキングはしてなかつたよ」

「なんで自殺なんか！」

「そうだ。なんで自殺なんか選んだんだ。まだなにもしていないなら死ぬ理由だつてないはずなのに。なんで、自分から死ぬようなことを。

「ポツド！ ナインズを治してつ！」

「ヨルハ機体2Eに課せられた任務は、ヨルハ機体9Sの情」

「まだナインズはなにもしてない！ 処分する必要はないはず。いいからさつさとやれ

！」

「ヨルハ機体9Sに投与された物理ウイルスは即効性が高く、現段階でウイルスの」

「いいからなんとかして！ これは命令だつ！」

「2B……」

「大丈夫。ナインズ今治すから。もう少しだけ待つて、お願ひ」

「そうだ。大丈夫だから、なにも問題なんてないんだから、頼むから。

「まだかよポツド。はやくしろよ。なにやつてんだよ。急がないとナインズが」

「…………やつと、ナインズって呼んでくれたね」

「今はそんなこと言つてる場合じやない！」

目の前で、ナインズの体が腐り落ちていく。髪の毛が、指先が、足がどんどんと崩れてく。

止まらない。間に合わない。死んでしまう。

ダメだ。ダメだ。ダメだ。

こんな。

こんな。

「……」んな死に方じや、ダメなんだ」

そうだダメだ。このままナインズが死んだらそれはただの自殺になつてしまふ。
俺が殺さないといけない。そうじやないとナインズは――

「……今までのは全部嘘。この任務は君を殺すためだけのものだつた。君と話した雑談
も、くだらないじやれ合いも全部油断させるため。6日前から今に至るまでの時間は、
すべて君を殺すための」

「2B」

「つだ、だから君が自殺したたのは私にとつて誤算だつた。本当ならこれから君を絶望
させるための罠がたくさんあつて」

「2B」

「あしつ、あし、たは楽しい日になるはずだつたのに、おかげで全部台無しに」

「……涙」

「えつ……」

「泣いてるよ。」2B

なんで、違う。これはそうじやなくて

「これは、違くて、これはえつと、そう。悔しくて君の絶望する表情を見ることができなくて、悔し、くて」

「……2B。君は本当に、やさしい人なんだね」「違う！そんなことはないっ！私はやさしくなんてないっ！」

違う。違う。ちがう。俺はそんなやつじやなくて、自分のことしか考えてない身勝手

「僕は君がどんなに悪い人だつてアピールされても、君を嫌つたり憎んだりはしないよ」「なんであつ、どうして!? そんなのはおかしい! 私が悪いんだ。止められたはずなんだ。防げたはずなんだ。私がちゃんとしてたらきみを、まもれたはずなんだ。だから」「……君が悪いんだとしても、僕の答えは変わらないよ」

君は恨むべきだ。憎むべきだ。呪うべきだ。全部俺のせいだと言うべきなんだ。

自分の死の原因を押し付けるべきだ。知ろうとしただけで殺されるなんて理不尽許せるはずがない。そうじやないといけないんだ。なのに――
声を発する振動で、体が崩れていく。ただそれだけのことでも壊れていく。
なんでだ。どうしてだ。なんでそんな顔でこつちを見るんだ。

「……だつてね。僕は君が、2Bのことが」

痛いはずだ。苦しいはずだ。辛いはずだ。もつと生きたいはずだ。

なんでだよナインズ。なんできみは、きみたちは最期にそんな風に――

「大好きだからね」

わらつていられるんだよ。

「アハ、ハハ、ハハハハハハハ

遠くから、嗤い声が聞こえる。

近くから、嗤い声が聞こえる。

「ハハハハツハハハハハハハ

この世の全てを嗤っている。醜い醜いと、全てを見下している。

耳を塞いでいるはずなのに、ずっと聞こえてくる。

耳障りだ。聞いてるだけで吐き気がする。

「ハハハハハハハツハハハハツ」

この世のどんなに醜いものを集めても、この声には敵わないだろうと確信できる。ここまでひどいと逆にどんなやつの声なんか気になつてきた。きっと、この嗤い声と同じようなひどい姿なんだろう。

あたりを歩いて探し回るが、見つからない。声との距離は近づきもせず。遠ざかりもしない。

ふと、足元に真っ赤な水溜まりを見つけた。覗いてみると中には、なにもかもを恨めしそうに見ている。醜いバケモノがいた。

「報告・ヨルハ機体9Sの義体機能の停止。任務工程に従い、9Sの現状自我データの破棄と指定自我データのインストール」

「……」

「推奨：9Sの現状自我データの破棄と、指定自我データのインストール」

「……ポツド」

「推奨：9Sの現状自我データの破棄と、指定自我データ」

「……………ボツア……………お願い」

「……ボツド042より2E。任務の「

「少しでいいの……」

[]

「……ありがとう」

終わりまで、あと2年

ずっと傍にいますよ。絶対に

「はい。それではこれで定期連絡を終了しますね。残りの期間も頑張って下さいね。 2
Bさん」

『了解。お土産期待してて』

「わかりました。楽しみにしてますね！」

通信を閉じる。

2Bさんは今人類軍の海上輸送船の護衛任務を行つてゐる。この海域での戦闘はここ3年間確認されていないけど油断は禁物。海上での戦闘は普段と勝手が違うから特に気を付ける必要がある。アンドロイドが海に落下した場合は救助できる可能性はほとんどのないから。ヨルハ機体に限らず、大半のアンドロイドは水中での活動は想定されていないからだ。

もし沈んでしまつたら自我データの巻き戻しが行われ、今なら8日前の2Bさんが起動することになるだろう。

2Bさんなら機械生命体に遅れをとることなんてまずないだろうし、普段はちょっとあれですけど、任務中は意外と真面目ですしね。多分大丈夫だと思いますけど。

ただ、問題は――

「…………今日は2Bさん。安定してるみたいでよかつた」

最近の2Bさんは少し不安定だ。

普段は大丈夫だけど、ふとした瞬間何もない所で立ち止まってボーッとしていたり、急に笑いだしたり、敵を執拗に痛め付けるような行動をする。以前までの2Bさんではしなかつたことを時折するようになつてしましました。

そういう時の2Bさんは観測しているメンタル値の変動が激しく、声を掛けても聞こえないことがよくあります。

いつもなら確実に作戦を遂行するために撤退して仕切り直したりする場面でも、敵陣に飛び込んで行つて自身が機能停止一歩手前といつた状態になることが増えてきます。

「さて、次の任務先の情報収集しなきや。いつも情報ないと不安そうな顔しちゃうし。そういうときの2Bさんちょっとかわいくて好きだけど」

2Bさんは、変わった人だ。

一番最初、2Bさんが稼働したての頃はいつも心配していた。任務中になぜか釣りしててし、動物を追つて行つて作戦エリアから出そうになるし、何時間も日向ぼっこしてるし、気づいたらまた釣りしてるし。この人はちゃんと任務をこなせるんだろうかって

いつも心配していた。

それでも、やるべきことはしつかりやつてくれて、合同任務とかの他の人がいる時は自重してそういう部分は見せないようにしていたから周りには変に思われてないけど。多分、そういった2Bさんを知っているのはわたしと司令官ぐらい。あともう一人いふと言えばいるけど、今は知らないだろうから実質2人だけだ。

この前、休憩中に270との会話で2Bさんの話になつた時に、眞面目とか頼りになるとか言われてる最中に司令官が通りがかつてすごい複雑そうな顔して通り過ぎて行つたのが記憶に残つてゐる。気持ちはわかりますけどね。わたしも顔がちょっと引き攣つてたと思いますし。

「うーん……。次の任務が終わつたら一旦バンカー帰つてきてもらつて、データオーバーホールとか受けて貰つてちょっとでもゆつくりしてもらいましょうか」

2Bさんは、強い人だ。

稼働から確か5ヶ月ぐらいの頃、周りからは同じB型4人分の力があるつて言われて当時話題になつていた大型機械生命体を1人で倒しにいくことになつてしまつたことがある。

大勢の人があつたのに1人でなんて無理だつて、司令官には抗議したんですけど……。

新型機であるヨルハの性能を周知するチャンスだ、とか。
達成できれば他のアンドロイドの士気向上も狙える、とか。

2Bの能力を考えれば問題ない、とか。

色々言われてしまつて、結局2Bさんを一人で送り出すことになつてしましました。
まあ、あつさり帰つてきたんですけどね。さすがにボロボロでしたけど。

そんなことがよくあつて、一時期は他のB型は2Bさんを超えることが目標だつたつ
て、隣の席の190が言つてました。確かに2Bさんは強いんですけど目標としていいの
かどうか。たまたま近くにいた司令官はなんとも言えない顔をしてました。気持ちは
よくわかります。

「そういうえば」この前、セラピーフォローをするとき心が落ち着くとかなんとか190が
言つてたような？ちょっと調べてみましょうか」

2Bさんは、泣き虫な人です。

2Bさんの本来の任務。2Eとしての5回目の任務の後、データの整理をしてたらい
きなり救援要請が飛んできました。もう慌てましたよ。救援要請なんて初めて受け
ましたから。

なにかと思つたらポッド042からの信号なんです。2Bさんと一緒に自室にいる
はずの。内容は自室に来てくれつてだけで、不思議に思いながら向かつたんですけど、

そうしたら……。

2Bさん、泣いてたんです。枕に顔を押し付けてずっと謝りながらひたすらに泣いてたんですね。

ごめんなさい。ごめんなさいって、ずっと。

気付いたら抱き締めて頭を撫でてました。少しでも気分が軽くなるようにと。せめて一緒にその苦しさを背負えるようになって。泣いている原因はすぐわかりました。任務を受けるときいつも苦しそうな顔で、終わつた後もなにかを我慢してるような顔でいましたから。

きっと、これまでも泣いてたんでしょう。そして毎回泣いていてポッドが困り果てた結果わたしに助けを呼んだみたいです。原因が原因ですから、他の部隊員に助けは求められないですし。

それからは毎回、任務が終わつたら2Bさんが落ち着けるまで抱き締めています。回を重ねるごとに立ち直るまでの時間が延びていって心配だつたんですけど。

「……うん。今はちょっと疲れてるだけだから、時間があれば元に戻つてくれる、はずです」

2Bさんの不調は徐々に周りに知られていつた。

もともとヨルハでの筆頭戦力みたいに見られていたし、最近は無茶な戦いばかりし

ていたから戦績も急激に上がつていつていて。この前の大規模作戦でもとても頼りにされていたんですけど……。

大規模作戦の途中で笑いながら単騎で敵基地への突入を慣行。その結果は大勝利に終わりました。ですが周りからは作戦を無視し、味方を危険に晒したことに対する非難の声もありましたが、結果を出したことによりそういった言葉も消えました。

それ以降直接はなにも言われませんが、あの作戦に関わってた人達が2Bさんを不気味なものを見る目で見てることを知っています。そしてそのことを気にした人たちが理由を聞き、またぶしつけな視線を向けてきているのも。

2Bさんもそれに気づいているからか、最近は極力バンカーに帰つてこようとはしません。

『実は論理ウイルスに感染してしまつていてるから、帰つてこないんだ』

『機械生命体との接触を図るために外での活動を増やしてる』

最近はそんなひどい噂が流れています。何度も何度も否定しているんですが、あまり効果は無くて……。

ついには今度の定期報告会で、今の自我データを破棄して再インストールをするべき。なんて意見が提出されるという話も聞きました。

そんなことはさせません。させてたまるもんですかっ。

2Bさんは変わつていて、強くて、泣き虫ですが。とてもやさしい人です。

いつもバンカーにいるわたしに、お礼だなんて言つてキレイなお花の画像を撮つてくれたり。お花を持ち込めないかつて司令官に直談判したり。わたしのくだらない話やちよつとした愚痴を静かに聞いてくれたり。

そんな、そんなやさしい2Bさんを消させたりなんてさせません。

「確かに、戦闘用アンドロイドの能力は記憶データの量に比例する」て論文があつたはずだから、そこから反論して、反対の空氣に持ち込んでいければ

わたしはオペレーター60。ヨルハ機体2Bの情報支援担当。

戦うことはできないんですけど、2Bさんを守るのはわたしの役目です。

だから絶対に

「2Bさんを1人になんてさせません。絶対に」

だからもうちよつとだけ、頑張って下さい。

「よし。やるぞー！おー！」

なんか思つてたのと違う……。

「合同任務……ですか？」

「はい。その通りです」

「なんていうか、随分急な話ですね」

「ええ。次の任務先は想定よりも危険な可能性があるとのことで。相手の方は現在別の任務を行つてゐるらしく、現地にて合流するとのことですが」

「へー。そうなんですか」

だとしても唐突な話だな。普段はどんな任務でも1人での調査だったのに複数での任務だなんて。

「それで何人で行う任務ですか？それと相手は決まつてるんですか？あ、実は僕の知つてる相手だつたりしますか？」

「9S。これは任務です。あまりはしゃがないでください」

「はいはーい。わかりましたよー。で、どうなんですか？」

「はいはーい。わかったよー。は、全く……」

仕方ないじゃないか。誰かと一緒に任務なんて初めてだし、さつきから楽しみで仕方

ないんだから。

「人数は貴方を含めて2人」

「お、2人つきりですか。仲良くできるひとだつたらいいんですけど」

「……相手はこの方です」

「では拝見させていただきます」

オペレーターさんが渡してくれた画面を確認する。えーと、相手の名前は……
「2号B型。2Bさん。戦闘モデルですか。僕は戦いが苦手だから助かりますね。どんな人なのかな？」

「……ええ。知つてます。次の画面を」

なにに、これは2Bの戦闘記録か。これなら大まかな戦力を確認でき——

「……あの、オペレーターさん？」

「なんでしょう？」

「この画面バグつてませんか？なんか数字がおかしくなつてるとと思うんですけど」

「正常です」

「へっ？」

「その数値は正常です。なにも問題はありません」

「ほ、本当ですか？これ凄まじい数だと思うんですけど……」

本当に間違つてないのかこれ？いやいやS型の僕と比べたらそりや、B型とは大きい差はできるか。いや、だとしてもこの差は大きすぎる気がするか。

「な、なるほどさすがB型つて感じですね。この戦績はB型の中だとどれぐらいすごいのかとか、わかつたりしますか？」

「一番です」

「へっ？」

「一番です。つまりヨルハ部隊最強です」

「なつ、え、最強？」

「……敵撃破数92003体。被撃墜数7。任務達成率98.9%。どれをとってもB型最強です」

やつぱり！おかしいと思つたんだよ。

「9万つてなんですか！ヨルハはまだ稼働してから2年ぐらいしか経つてないんですよ。どんな戦いすればそんなことになるつていうんですか！」

「……以前人類軍の支配圏内に隠蔽されていた敵基地があり、大規模作戦が発令されたのは覚えてますか？」

「覚えてるもなにも、僕が見つけたやつですよね？」

「ええ。貴方が調べたいことがあるからもうちょっとだけと言つていた。その14回目

のもうちよつとで発見したものですね」

「うつ。それは、その、一旦置いといてもらつて。それでその作戦がどうしたんですか？」

「結果はご存知ですか？」

「作戦は成功して、敵基地は壊滅したとだけ……」

「……その作戦で一人の隊員が敵基地に侵入。基地内部の大型エネルギー機関を破壊したことにより敵軍は崩壊。その際に約2万の機械生命体の活動が停止しました。それを行つたのが」

「この2Bさんつてことですか」

「ええ。ですので彼女の直接戦闘での敵撃破数はその2万を引いた数が正しい記録になります」

「いや、だとしても7万は自力で倒したつてことになるんですけど……
でもそんなすごい人と合同での調査任務つてことは――

「次の任務つて、結構危ない感じなんですか？」

「先ほども言いましたが、想定よりも危険な可能性があるという話しか私も伺つていません。ですが司令部はこの任務を重要視しているようにも感じられました」

「……そうですか。わかりました。細心の注意を払います」

「常にそうして下さい」

「もー、そういうこと言うー」

本当にお堅いんだから。

あとこれを聞かないと。

「結局この2Bさんってどんな人なんですか？」

「……」

「えつと、オペレーターさん？」

「……私も詳しくは知りませんが、静かな人だと、聞いたことがあります」

「あー、そうなんですか。それはあまり僕と性格合わないかも知れませんね」

「……ええ。ですので9S。なるべく普段のようなおかしな行動はしないように心がけて下さい」

「ひどいなー。まるで僕が普段おかしなことしてるみたいじゃないですか」

「……」

「大丈夫ですよ。さすがにちょっとは自肅します。初対面の方に自分を押し付けるような真似はさすがにしないですよ。安心してください」

僕だつて多少は気遣いもできるんだし、模範的なS型がどういう存在なのかも知つてる。ちよつと息が詰まるかもしれないけど、うまくやれる自信はある。

「……9S」

「はい。なんでしょう?」

「……相手は貴方と違ひ戦闘に特化したB型モデルです。戦闘も自ら率先して行つている可能性もあります」

「は、はあ」

「最近はあまりいい話も聞きませんし、一時は敵と繋がつてゐるなんて噂されることもありました」

「あの、オペレーターさん?」

「さすがにそんなことはないと想いますが、万が一ということもあります。もしそういった事態に陥るようなことがあれば冷静に対処し、すぐさま連絡を」

「オペレーターさん!」

「……はい。いえ、そうですね。よく知らない方に対する大変失礼なことを言いました。忘れてください。」

「……わかりました。それじゃあ準備ができたら現地に向かいますね」

「ええ。9Sその、気を付けてください」

「了解です。ちやちやつと終わらせてきますよ」

「おかしい。オペレーターさんは厳しいことをよく言うが、相手は貶めるような話はし

ない人だ。それなのに詳しく述べないと言つてはいる相手に対してあんな言葉、不自然すぎる。

これから任務に向かわないと行けないし、詳しく述べる時間は無いけど、話を聞くぐらいいは出来るはず。

ターミナルルームには801Sが常駐してるはずだし。少し話を聞いていこう。

「この辺は外れかな。機械生命体の痕跡もまつたく見当たらないし」

果たして、司令部が危惧するような状況になるんだろうか？ とりあえずもうちよつとだけここを調べてから、向こう側の調査といきますか。よし。そうと決まれば……

「報告：ブラックボックス反応あり。ヨルハ機体2Bのものと推測される」

「お、来ましたか。では、出迎えに行くとするかな」

さて、多少は話を聞いてきましたが、実際にはどんな人なのやら。

「……」

「確認：ヨルハ機体9Sで間違いはないか」

「えっと、はい。今回の任務を合同で担当することとなりました。9Sです。2Bさんですよね？よろしくお願ひします」

「……」

「……あの？」

「推奨：任務の達成」

「えーっと、とりあえず現在までで得られたデータを共有しますね」

「……」

「了解」

現実は予想の斜め下を突き進んでいった。

静かな人だと、オペレーターさんは言つてた。確かにそうだけど、これは喋らないから静かなだけで静かな人つて評価は間違つてる気がする。静かというか冷たいって印象があつてる気がする。

おかしいな。801Sは最低限のコミュニケーションは取つてくれるつて言つてたんだけどな？いや確かに頷いたりはしてくれてるから、最低限のコミュニケーションは取れてると言えば取れてるけど。

さつきから目線というか、顔ごと逸らされて僕のことを見れないようにされてるんだけど。なんか今気に障るようなことしたかな僕。はあ、残りの調査が終わるまでは、これが続くのか。

「……ちよつと、思つてた合同任務と違うな」

なんか向こうもずっと殺氣立つてるとか、気を張つてるし。緩い感じではいけなさそうだ。

結構楽しみにしてたんだけどな。合同任務。仕事だから仕方ないとはいえ、残念だ。仕方ない。あまり隙もなさそうだし司令部のハツキングは、やっぱりしばらくは延期しないとダメかな。

大人しくするの苦手なんですかね……

調査を開始してから4日が経過した。

この期間で分かつたことがある。彼女はちょっと変わった人だつてこと。

2日前は別々の地点をそれぞれで調査するつて話になつて、時間を決めて後で合流することになつたんだけど。ちょっとばかし調査に熱中しそぎちやつて、慌てて向かつたらまあ当然待つてるよね。すぐに謝つたんだけど何もなし。もちろん時間に遅れたことについての叱責も。

一緒に行動するときは必ず僕の3m前を歩く。立ち止まつたり、横に移動してもピツタリと距離を保つてくる。顔は常に前を向いたままで。後頭部にセンサーでも搭載されてるんだろうか？

それと、初日から変わらず口は噤んだままなんだけど

「……」

〔疑問：その問い合わせ意味〕

「……」

〔否定：効果があるとは思えない〕

「……」

「了解」

これ、明らかに会話してるよね。

この間2Bは身振り手振りもなく頷いたりだつてしてないのに、ポツドには思ったことが伝わってるみたいだ。実は僕が知らないだけで脳内無線でも開発されていたんだろうか？おかげで彼女の声も未だ聴いてない。実は声帯機能が停止してるんじゃないかと疑っている。さすがにないだろうけど。

あと気になつたのは、たまにだけど僕の方をジットと見ていることがある。

僕が彼女を見てない時限定で。

その時は普段一文字に結んでいる口が少しだけ緩む。僕が視線を向けたらすぐに顔背けるけど。

僕を見てなにを考えているんだろうか。聞いてみたいけど、どうせ答えてくれないしな。

『オペレーター210より、9S。定期連絡の時間です』
「はーい。こちら9S。今日も地球はいい天気ですよー」

『問題ないようですね。それでは通信を』

「あ、すいません。聞きたいたことがありますから、ちょっと待つてください」

『あなたがそのようなことを言うのは珍しいですね。なんでしょうか?』

『さつき、敵と遭遇し戦闘になってしまったんですけど』

『戦闘に?本当に敵が存在していたのですか。司令部の予測精度はさすがですね。負傷は、していないうですね。あなたは戦闘が苦手ですから多少は傷を負っているかと思つたのですが』

「ええ。2Bさんが敵のほとんどを受け持つてくれましたから……」

『彼女が?……なるほど。さすがヨルハ最強と噂されるだけはありますね』

3時間前、僕らは戦闘状態に陥った。

森林地帯で機械生命体の集団と遭遇。お互に目視できる距離からの戦闘となり、すぐさま乱戦状態に移行した。個体性能ではこちらが圧倒的に上だつたが、なにより数の差が大きかつた。最初敵は20もいなはずだったのに、次から次へと敵が湧いてくる。

状況は不利だつた。

だが僕はそんな中無傷のままでいた。敵は前後左右、果ては頭上から奇襲を仕掛けてくることもあった。そんな戦場を僕は経験したことはない。だがそれでも無事だつた理由は、ここには彼女がいたからだ。

圧倒的だつた。

この戦場では不利だと判断したのか。ポッドを使い周りにある木をへし折り、無理やり開けた場所を作り、装備していた槍と大型剣を敵に投げ捨てて、小回りの利く小型剣と格闘装備に切り替えた。地を走り、宙を駆け、縦横無尽に敵を駆逐していった。

すごい。そんな感想しか出てこない。

これがB型。これが最強。そう言われるのも納得だつた。

喋らないとか、態度が悪いとか、そんなものがどうでもいいと思うぐらいに彼女は強かつた。

そして僕はそんな彼女の後ろで、せめて邪魔にならないようにとできる限りのサポートをしていたんだけど。明らかに彼女の足を引っ張つていた。木を倒してくれたおかげで剣はなんとか振れるようになつたけど、敵はひつきりなしにやつてきて。ハツキングによる敵の撃破というS型としての力を發揮することができなくて、そんな僕を庇つて2Bは徐々に傷ついていった。

「ええ。最強なんて言われる理由がよくわかりました。けど……」

『けど? なにがあつたのですか?』

「……僕の任務は単独での調査、偵察が主です。戦闘ではありません。そして誰かと一緒に任務を請けたこともないので、当然誰かと共に戦つたこともあります」

『……』

「ですので、戦闘に於けるサポートはデータとしてインストールされていいるだけで、実際に行つた記憶があるわけではありません。ですから、満足に戦闘支援を行えるわけがないんです」

『それは、仕方のないことです。今までやつたことのないことをやれと言われてできる。

そんな存在はあまり多くなく』

「違うんです……」

『違う、とは?』

「サポートができていたんです……」

『そうだ。できていたんだ。』

彼女は僕の拙い援護を完璧に受け取っていた。

初めての共闘。不慣れな戦場。拙い支援。

そんな状況で、彼女は僕が初めての戦闘支援でどういう動きをするのか、完全に把握した動きで戦いを続けていた。

戦績は確認した。最強と言われる力も見た。きっと過去にS型と共に闘したこともあるんだろう。だとしても、圧倒的な戦力差の中で足手まといを守り。なおかつそんな僕の動きを阻害しないように戦いを続ける。そんなことが可能なんだろうか。

「あの戦闘は僕を知らない限り不可能です。もしかして、彼女と僕は過去に戦つたことがあるんじゃないですか？」

『……』

「どうなんですか。オペレーターさん」

『……』

「オペレーターさん？」

『……その、情報は、機密事項となつていて、お伝えすることはできません』

「機密事項？ ただ以前の記録を確認したいだけです。そんな大それたことを知りたいわけじやなくて、ただの』

『機密事項です。お伝えすることはできません』

「……オペレーターさん」

『9S。忘れなさい。今ならまだ間に合います。このまま何事もなく残りの任務期間を消化さえできれば、なにも問題はありません』

『……』

『9S。変なことは考えないでください。あと3日。たつたそれだけなんです。お願ひですか』

「……通信を終了します。それじゃあまた」

『待ちなさい9S！お願いだから、私はもうあなたを』

通信を切る。

機密事項？過去に彼女と戦つたことがあるかどうかが？明らかにおかしい。疑つてくれつて言つてるようなものじゃないか。

「ポッド、僕と2Bさんの過去の接触記録はあるか？」

「否定：9Sと2Bの接触記録は無い」

「こいつも知らないか。となると今すぐ司令部のサーバーにハッキングを仕掛けたいところだけど、さすがに準備が整つてない。相手は基地のメインサーバー。防壁も最新の物でできているはずだ。」

なら今できることといえば

過去を知つてゐる存在から直接情報を引き出すこと。彼女は今、戦闘のダメージを癒すためにスリープモードに入つてゐる。ハッキングを仕掛けるには絶好の機会だ。ポッドは動いてるかもしれないが、大した問題ではないだろう。

「ポッド、部屋に入つたらポッド042の動きを止めろ。その間に機能を停止させる」

「ポッド153より、9S。その行為は部隊への反逆行為に相当する。推奨：停止」

「2Bはさつきの戦闘で敵の論理ウイルスに感染した可能性がある。チエックをするのにポッド042が邪魔だ。ウイルスが検知できなかつたらちやんと謝るよ」

「推奨：停止」

「いいから、これは命令だ」

「……」

面倒くさいな。戦力が減るけどポッド153もいつそのこと

「提案：落ち着け」

「つな、ポッド042……？」

なんで、2Bのポッドが外に

「これ以上の接近は2Bのスリープモードが解除される恐れがある」

「あ、ああ。そうだね。ちょっと確認したいことがあつたんだけど……」

「提案：私が聞こう」

なにかが近づいたら再起動するように設定されているのか。厄介だな。さすがにあの戦闘を見た後で正面からやり合う気は起きないな。

「なら聞くけど、僕は2Bさんと過去に会つたことはある?」

「否定：9Sと2Bの接触記録は無い」

「そうなんだ。それにしてはさつきの戦闘は不思議だつたと思つてね」

「推測・ヨルハ機体2Bは大規模作戦を数多く経験しており、その際に他のS型モデルとの戦闘データを用いた結果。先ほどの戦闘に繋がつたと思われる」

「……ポツド153には聞いていない」

「回答：9Sは2Bに会つたことはない」

「……ポツド042。お前も同じことを」

埒が明かない。バレる可能性は高いが残りの任務期間でなんとか隙を見つけてハッキングを

「繰り返す。9Sは2Bに会つたことはない」

「今聞いたさ」

相手は戦闘に特化したB型。油断はできない。それもヨルハ最強の実力者。なんとか罠に嵌めて情報を奪い全力で逃走。完全な反逆行為と見なされるだろうけど、もともと司令部にハッキングをするつもりだったんだ。予定が早まつただけだ。

「繰り返す。9Sは2Bに会つたことはない」

「……うるさいな。僕、9Sは彼女に会つたことはないんだろう？わかつたよ」

「否定」

「だからわかつ、つて……今なんて？」

「否定」

「どういうことだ？ ポツド042はいきなりなにを言つて

「ポツド153よりポツド042。意図的な虚偽報告は禁止されている」

「ポツド042よりポツド153。当機は虚偽報告を行つていない」

「ポツド153よりポツド042。それ以上の発」

「ポツド153に命令！ 別命があるまで発言を禁止する！」

今の発言の意味はなんだ？」

なぜ今、ポツド153はポツド042の発言を否定しようとした？

そんなの、それが否定しなきやいけないような内容だからに決まっている。

「ポツド042。質問だ。僕は2Bさんと会つたことがあるのか？」

「否定：9Sは2Bに会つたことはない」

「以前の僕、9Sは2Bさんに会つたことがあるのか？」

「否定：9Sは2Bに会つたことはない」

「……9Sは彼女と会つたことがあるのか？」

「その質問には回答することはできない」

「これだ。

「回答できない理由は」

「機密事項に分類されるため、閲覧には権限が必要」「……権限があれば答えてくれるのか」

「肯定」

「僕は2Bさんに会つたことはない。当たり前だ。そんな記憶は持つていらないんだから。」

「だけど、以前の僕。9Sは2Bさんではなく『彼女』に会つたことはある。」

「それはつまり」

「（）にいる彼女は、2B、ではない？」

「その質問は機密事項に分類されるため、回答できない」

「当たりだ。」

「2B」という名前は偽装。本当の名前が別にあるから9Sは2Bに会つたことがないってわけだ。

偽装された名前。司令部へのハッキングを試みようとしたこのタイミングでの急な合同任務。そして以前に僕は彼女と会つてている。

「ここから導き出される彼女の正体は

「……内部の不穏分子を密かに殺す処刑人。そして以前の僕は彼女に殺されている。そういうことか。ポッド042」

「……」

「だけどなぜ？それを僕に教えるのは禁止されてるはずだ」「……」

問題があるから今まで隠してきたはずだ。なのになぜこのタイミングで「なぜだ。ポツド042」

「……当機はヨルハ機体2Bの随行支援を担当している」

「ああ、それが君たちの役目だ」

「よつて私は、2Bの負担を解消する義務がある」

「負担……？」

「2Bのスリープモード解除、及び再起動を確認。随行支援を再開する」

「なつ、話はまだ」

「……行つてしまつた。とりあえず分かつたことを整理しよう。

今わかつてているのは、以前の僕が司令部が隠しているなにかを知り、そして2Bと名乗つていて彼女に僕は殺されたこと。そしてなんらかの負担を彼女は受けていて、それを解消するためにポツド042は僕に情報を与えた。

謎が減つてさらに増えた。

調べたいと思うものが増えるのは普段なら楽しいんだけど、今はもどかしい。下手に

調べようものなら殺されるのが目に見えている。

ともかく今の僕にできるのは

「司令部へのハッキングは中止する。監視は今後も続けてくれていいよ」

「……」

「残念だ。もう少しでメインサーバーへの経路を作れそうだつたのに。

「まさか侵入前にバレてるとは思わなかつたけど、これからは大人しくするよ。まだ死にたくないしね。調べたいことはいっぱい残つてる」

「……」

「……ポツド？ああそつか。ポツド153発言を許可する」

「……ポツド153より9S。司令部は不穏分子を常に監視している」

「今回のことによくわかつたよ。だからこれからは大人しくするつて」

「……」

ポツド042が自発的に動いた理由。彼女にはそうしなければいけないなにかがある。

とりあえず今一番気になるのはそれかな。残りの任務期間で軽くだけ彼女のことを探つて、あとはゆつくりと時間をかけて調べていこう。殺されたらたまつたものじやないしね。

「さて、それじゃあ僕もひと眠りするかな。眠ってる間に殺したりなんてこと、しないで
くださいよ。ポツド153」

「……了解」

さて、起きたら彼女とどうやって、接しようかな。
明日が楽しみだ。

ポツドなんか嫌いだ

最近俺の日常がおかしい。

いつものように6〇は優しいし、司令官は相変わらず嘘がわかりやすいし、ポツドは頼りになる。なんだけど。なにがおかしいかというと

「あ、2Bさん。今から出撃ですか？ 今回の作戦エリアは僕が調査したんで、大いにデータを参考にしてください。いつもみたいな活躍期待してますよ！ それでは僕、オペレーターさんに呼ばれてるので失礼しますね」

9Sが声を掛けてくる。そう。9Sが俺に声を掛けてくるんだ。会う度に

この前合同任務があった。正確にはそういう名目の9Sの見極め期間だつたけど。その時どうせ殺すことになるんだからと、俺は9Sをこつびどく扱つた。視界に入れず、話しかけられても無視して、調査も言われたより小さい範囲で無理やり受け持つて9Sの負担を増やしたり。それはもう考えられる限りひどい態度で接した。

そしたら懐かれた。敵を一緒に倒した次の日から。いきなり。

やれ、好きなものはあるのか。嫌いなものはあるのか。

やれ、担当オペレーターとはどんな話をするのか。戦闘の秘訣はなんだとか。

頑張つて無視してたんだけどさすがにかわいそうになつてきて、後半からはポツドに答えさせてた。これなら会話じやないから大丈夫つてポツドに言われたし。さすがポツド頭いいよな。

んで、任務最終日。そろそろ見極めも終わつて処分命令が来るかなつて怯えながら連絡を待つてたら、まさかの任務終了。9Sからはまた一緒になつたらよろしくつて言われてお別れ。バンカーに帰つたら60が笑顔でお出迎えしてくれて、よかつたよかつたつて泣きながら抱きしめてきて。司令官に聞いても状況が変わつたとしか言つてくれないし、終始俺は困惑しつぱなし。なにがどうなつてるんだつてばよ。

「あ、おはようございます。2Bさん。聞きましたよこの前の任務の話。さすがヨルハ最強、大戦果だつたらしいじやないですか。いやいや、これは僕も気合入れて調査したかいがありましたね。これからも期待しますよ。2Bさん」

なんで俺に気づいたら、急に話しかけに来るの？今君と会話してたS型の子ビックリしてるぞ。こいつに話しかけて大丈夫かよつて顔してるよ？わかってるのかそこんとこ？

「2Bさん。丁度よかつた。今面白い話を洗濯班の人から聞いたんですけど、聞きます？ここだけの話。司令官、普段はあんなにビシツとしてるのに、部屋は荒れ放題でボディのチエツクも結構サボつてるんですつて。いやー、人は見かけによらないですよ

ね」

知つてゐわそんのこと！たまに氣になつて俺が片付けに行つてゐんだぞ。ほつといたらあの部屋足の踏み場もないくらいに荒れて、すぐい時間かかるんだぞ。
つて、違うそうじやない。

俺は全然9Sの話なんて興味なんかないし、むしろ嫌いだし。顔も見たくないレベルだし。また嫌がらせしちゃうぞ。こう、なんか、えつと、そう。アレしちゃうぞアレ。だからこつち寄つて来るんじやないよ。

「つてな具合で、敵はエリアを分散してゐみたいです。2Bさんなら問題ないと思いますけど、数が多いので十分に気を付けてください。あと罠も多かつたですからそつちも忘れずに」

いいよ。別に直接報告にこなくとも。

あとで60に教えてもらひから、わからなかつたらポツドに質問もするから
そんな感じで、最近は会う度に徐々に精神を削られてたんだけど

「どいうことで、今度また一緒に合同任務を請けることになりました。調査はほとんど僕が受け持つので、前みたいに戦闘になつたときはよろしくお願ひします。次は足手まで、安心してください。まあ、どこまでできるかわからないんですけど」

「……」

……合同……任務？

合同任務！？

なんで！？どうして！？ってかそんな話聞いてないぞ！？

「あ、正式な命令は今度だそうです。司令官に聞いたので2Bさんにも教えてあげようつて思つただけなので。一応来週の予定らしいですよ。いやー、意外と司令官つてお堅くないんですね。『機密だ』とか言われるものだと思つてましたけど」

司令官！？

どうなつてんだよ。9Sと会話したことなんて今まで大してなかつたつて聞いてたぞ。なんでそんなこと教えるぐらゐに仲良くなつてんだ。意味が分からん。

「それでまあ、またご一緒にさせてもらうつてことで、シミュレーターを使って連携の確認とかどうですかね？僕も実際に戦闘で邪魔にならないか心配で」

「……」

無理。無理です。むーりー。

いいよ別に確認とかしなくとも、こつちで合わせるからさ。9S相手なら目瞑つてもできるからいいって。だからいいです本当に。というわけでポッド出番だぞ。いつもならそろそろ口出してくれる頃合いだぞ。とにかくポッド助けてヘルプ。なんとか

断つて。

「どう、ですかね……？」

[]

100

ポツドおおおおおおおおおおおおおおお!

「……どうした！なんか言つてくれよ！いつもなら代わりに喋つてくれるだろ！」

「疑問：2Bが当機を凝視する理由」

なにが疑問だバーカ！わかつてんだろうが！いつも目線だけでわかつてくれてんじやん！目見えないけど！なんかこう上手く断つてくれよ。このままじゃ一緒に訓練することになるじやん！

[]

1

えーと、いいのかなボツド042?」

「質問の意図が不明。」
だが問題なし。
推奨：続行

バカ！アホ！マヌケ！裏切り者ー！あと、えーっと、バークバーク！！

なにが続行だよ！中止だよ中止！

「……」
「では、どうですか？2Bさん」

「……」
「……」

そんな目でこつち見るなよ。目見えないけど。なんか悲しそうな雰囲気出すのやめ
ろよ。俺がイジメてるみたいじゃんかあ。そんなことされても、俺は

「……」
「……」
「……そう、ですか。すいません。無理言つてしまつて」
「……」

「それじゃあまた。来週楽しみにしてますね」

あつ

「……」

「……疑問」

「……？」

「かまわないのか？」

「……」

ううううううううう、わかつた。わかつたよ！

「……待つて」

「なつ、え、2Bさん？」

もういいよ！ポッドが言うこと聞いてくれないからだかんな！バー！カバー！

「……シミュレーターは、あつち」

「ええ。ええ！そうですねっ！いやー、つい間違っちゃいましたよ。もつとバンカーに帰つて来る時間増やさないとダメですねやつぱり」

「……そう、だね」

「ですよね！現地の調査に夢中になり過ぎて自分の基地を把握してないとか何事かつて話ですよね。これは普段から気にしてかないと直らないですかね」

訓練終了後。互いの呼び名の話になり、2Bさんから2Bと呼ばれることになつた。
ナインズ呼びはなんとか逃げた。

怒るのはいいけど、頭叩くのはどうかと思う

「敵撃破。周囲の反応は?」

「……なし。任務の達成を確認。推奨：報告」

「繋いで」

「了解」

今日は敵の殲滅任務。まあ今日はつていうか、最近はずつとそうなんだけど。最近はあまりバンカーに帰りたくないから、敵を倒したらすぐ次へつて感じだけど。

「2Bよりオペレーター60。任務目標を達成。次の任務を」

『オペレーター60より2Bさん。さすがですね。今次を、つて、あれー、おかしいなー』

「……? どうかした?」

『いやー、南東に敵の反応が1つ残つてますねー。これはまだ任務続行ですねー』

「こちらでは確認できない。なにかの間違いじや?」

『いや、確かにあります。ということで今すぐ向かいましょー! 行きましょー!』

「えついや、でも」

『位置情報を送るので、あとはお願ひしますねー。ではではー』

「通信終了。マップデータを受信」

「……なんで？」

「推奨：任務の達成」

「なんだろう。敵は確かに倒し終えたはずなんだけどな。通信も無理矢理切られたし。それともついに60に嫌われてしまつて、これは遠回しにお前とは会話したくないってことなんだろうか。60に嫌われるとかマジ無理。死ぬ。」

「推奨：任務の達成」

「……わかった。行こう」

「いや、まだ嫌われたと決まつたわけじゃない。本当にこつちで確認できないだけで敵がいる可能性だってあるんだ。そもそも60に嫌われるようなことをした覚えなんて「どうしよう……。思い当たることがありすぎる」

「やべえよ。いっぱいあるよ。任務サボつて釣りとか動物と遊んだりとかよくしてたよ。そのたびに司令官に説教食らつてたよ。で、でも、任務は真面目にやってたし……」「愛想尽かされたのかな……」

「目標地点に到達」

「……到達って言つても、やつぱりなにもいないように見えるけど」

「周辺に敵の反応なし」

というかここつて

「なんで海？」

「マップデータは海底に敵が潜んでいるとされている」

「海底？ そんなのどうやつて」

俺、前ならともかく今はアンドロイドだから当然泳げないし。頭冷やして反省しろつてことなんだろうか。

「推奨：釣り」

「……は？」

釣り？ なんで？

お前いつだつたか反対してただろうが。つてか今任務中だし。

「……敵の反応がないなら、そんなことをしても意味はない。多分60のいたずら。もう一度60に連絡して確認してもらおう。もしダメだつたら、仕方ないけど司令官に直接連絡しよう」

「推奨：釣り」

「ぽ、ポツド？」

「推奨：釣り」

ポツドまで俺のことからかってるのかよ。いいだろ釣りなんかしなくても、別にそん

なことする意味無いし。今は眞面目な話だろ。だいたい普段から釣りなんてよくやつて……

「……私、前に釣りしたのはいつだっけ」

「10か月と4日前」

「そう、だつたつけ」

「2Bは当機の記録を信用できないか」

「……ううん。ずっと頼りにしてる」

全部が終わるまで、ずっと味方でいてくれるって知ってるさ。
でも、そつか。そんなにやつてなかつたつけ。

「……やろうか。釣り」

「了解」

「……」

「……」

「……」

「報告：新鮮」

「よし。次」

「……」

「……」

「ヒット・ゴミ」

「あとで捨てといて」

「了解」

なんか久しぶりだな。こういうの。

もう時間もあまりないからか、ストレスが溜まつて自覚あつたし、それを発散させるのに敵と戦つてばっかりだつたし。休む時間もあまりとらないようにしていったからな。未だに9Sと顔合わせるのはちょっと抵抗あるからバンカーにも帰つてないし。

「ポッド。60に繋いで」

「了解」

60にも、心配かけてたのかな。

「2Bよりオペレーター60。今、大丈夫?」

『はい。こちらオペレーター60です。いやちょっと今忙しくてまだ次の任務は指示できなさそうなので現地でもう少し時間をつぶしてほしいというか、なんというかつて感じで』

「……60」

『ですので、2Bさんはこっちが落ち着くまでゆっくりしてもらつて』

「ありがとう」

『え』

「心配してくれて、ありがとう。こんな嘘までつかせてしまって」

私情での任務内容の変更。バレたら当然問題になる。俺のために、わざわざそんなことまでさせてしまった。ただでさえ、俺の担当してるってだけで周りから厳しい目を向かれてるつてのに。

『……ごめんなさい。2Bさん。困らせてしまいましたね』

「そんなの別にいい。いつも私の方が迷惑をかけている」

『そんなことありません！2Bさんはいつも頑張ってるじゃないですか！』

「でも、味方を見捨てて敵に向かつて行つたのは事実」

一年前。ある大規模作戦で俺は仲間を見殺しにした。

俺が作戦を無視して一人で突撃したおかげで、味方は壊滅。気づいた時にはポツドが俺を止めようとしていて、60が通信越しに泣いていた。そして、目の前には動かなくなつた仲間がいた。

『……あの時の2Bさんはちょっと疲れてましたから、しようがないですよ……』

「しようがない。我を失つていたなんてのは仲間を見殺しにしていい理由にはならない」

『それは……そう、かもですけど』

「そのせいで私だけでなく、60も色々言われてるのは知つてゐる」

『なつ、なんで2Bさんがそれを』

いつも庇つてくれてたんだよな。俺を守つてくれてたんだ。それを俺はずつと知つていた。それなのに何もしようとはしなかった。自分が苦しいから辛いからって、周りに目を向けようとはしなかった。

「だから、本当はもつと早く言わなきやいけなかつたんだ」

『……2Bさん』

「ありがとう』

『……』

「私を見捨てないでくれて、一人にしないでくれて、ありがとう』

『そんな、こと』

「やつと言えて、よかつた』

『そ、そんなこと、当たり前じゃないですか！わたしは2Bさんの担当オペレーターなんですから。嫌だつて言われてもずっと傍にいますからね！これからも絶対にぜーつたいに2Bさんをひとりぼっちになんてさせてあげないんですからねつ！わかりましたか？2Bさん！』

今日は11944年11月23日。

全てが終わるまで、時間はほとんど残ってない。死にたいと思っていたはずなのに、死ぬのが怖いって気持ちが日に日に大きくなっていく。
けど、60が傍にいてくれるなら。

もう怖くなんてない。

きっと俺もあいつみたいに最後の瞬間も笑つていられるはずだ。

「うん。これからもよろしくね。60」

『はいっ。こちらこそよろしくお願ひします。2Bさん』

この後、司令官にバレて60と一緒に怒られた。
ちょっと痛かった。

いまさら、そんなこと

『もうつ、2Bさんったら、9Sさんがかわいそうですよ』

「あれは9Sが悪い。あそこまで驚くなんて思わなかつた」「もー。意地悪するのはやめたんじやなかつたんですか?』

『べ、別に意地悪なんてしてない……。なにかの間違い』

『まつたく……。知つてるんですからね、わたし。2Bさんがこの前まで9Sさんのこと無視してたの』

「それは、その、……めんなさい」

『わたしに言うことじやないですよ。もう』

『だつて、9Sがすごい寄つてくるんだ。だからちよつとこう、離れるように色々やつてただけで、別に意地悪してたとかじやなくて、その、ねえ。』

『さて、それじやあそろそろ定期連絡を終わりますね』

「えつ、もう?」

『もうつて、いつもより長いくらいですよ。それでは残りも頑張つてくださいね。2Bさん』

「あつ、うん。それじゃあ、また」

「通信終了。推奨：任務の継続」

もつと話してたかったんだけどな……

仕方ないか、あくまで定期連絡だもんな。帰つたらゆつくりおしゃべりしよう。

「終わりましたか？ 2B」

「ごめん。待たせちゃった？」

「確かにちょっと待ちましたけど、別に謝ることじやないですよ。定期連絡は担当オペレーターと直接情報交換する時間ですから、ちょっとぐらい長くても問題ありません」

「……そつか。ごめんなさい。ありがとう」

「だからいいですって、気にしないで下さい」

ほんと9Sはいいやつだな。今度なにかあげようかな。普段のお礼と、この前まで無視してたお詫びとして。60にも言われたし。

うん。いいな。そうしよう。

この任務が終わったら60と相談してなに贈るか決めないとな。

「さて、それでは改めて張り切っていきましょうか！」

「そうだね」

「もー、2Bつたら。もうちょっと盛り上げていきましょよ。折角の機会なんですよ」

「……感情を出すことは禁止されている」

「……それ、2Bが言うんですか？」

「……確かに、それもそうだね」

「ほんとですよ。もう」

何回目だろう。この9Sと一緒に任務は。

当たり前みたいに一緒に行動してるけど、俺の本来の役目を考えるとおかしいことだ。何回も何回も同じ9Sと一緒にいるなんてことは。

まあでも、きっとそろそろ限界だ。9Sがそんなに我慢できるわけないんだから。今回は長かったからいつもより辛いだろうけど、でも大丈夫。ちゃんと俺は役目を果たせる。原作の流れを変えないようにしないといけないんだから。なんちゃって、俺なんかに変えられるわけないんだけどさ。

今日の分の調査は終了。残りはまた明日。

だからもう明日まではこの廃屋でお休み。なんかこういうの友達と旅行に来たみた

いで楽しいよな。任務だけどさ。

「念のため、眠るのは交互にしよう。敵襲の可能性もあるし」

「ほんと、そういうところは真面目ですよね2Bは。さつきまであんなにはしゃいでたのに」

「……うるさい。じゃあ9Sはずっと起きてて、私は寝る」

「ああつ、ごめん。ごめんなさい。ちょっととした冗談ですって、本気にしないでください

いってば」

「……わかつてる。言つてみただけ」

「もー、2Bつたら冗談わかりづらいんですから」

「元はと言えば、9Sが茶化すせいでしょ」

やつぱりいいな。こういうの。

ほんとすごいよな9Sは、話してたらどんどん楽しい気分になるんだから。

「ところで2B。一つ聞きたいことがあるんですけど」

「なに? 答えられることならなんでも言つて」

「なにをそんなに隠しているんですか?」

「えつ、……なんの、こと……?」

隠してるつて、まさか

「本当はもう少し時間を置くつもりだつたんですけど、今日の様子を見る限り、なるべく早い方がいいと思つて」

「……なん、で」

「前からでしたけど、最近は特にそうですよね。今年になつてから悪化してゐみたいですね」

「……」

舐めてた。9Sのことは知つてははずだつたのに、隠し通せてると思い込んでいた。あの好奇心の塊のとも言うべき9Sが気づかないわけないのに。

「ずっと気になつてはいたんです。2Bがそんなに頑張つて隠してるものはなんなんだろうつて。まあ、まつたく分からなかつたんですけどね」

「……」

どうしよう。どうしよう。どうしよう。

なにも隠してなんていないつて言う？9S相手に嘘をつく？

それとも、本当のことを言う？

どうしよう。どうすればいい。どう答えたらいい。

「……」

「……最初は僕のことだと思つたんです」

僕のこと？

「僕と2Bとの過去に気づいた僕が、復讐するとか考へてゐるのかもと思つていたんで
す」

「えつ」

「今までにそういうつた僕がいたから、そうなるんじやないかと警戒してゐるのかなつて」

「やつぱり、気づいて」

「気づいてたのか。この9Sも、今までの9Sみたいに気づいてたのか。

でも、一体いつから

「それにしては2Bの態度がおかしかつたんです。これまで何度も一緒の任務を請けて
きましたけど。2B、僕のこと全然警戒してないんだもの」

「……そんなの」

「するわけない。9Sはそうしてもいいんだ。そうする権利が9Sにはあるんだから。
「今日もそう。簡単に背中は預けるし、簡単に無防備になるスリープモードに入るよう
提案してくるし。だから、僕のことではないんじやないかって」

「……」

「それと、これは推測じゃなくて、ただの想像ですけど」

「……」

「隠しててるというか、正確には逃げててるんじやないかって」

なにを、いつて

「まあ、想像ですけどあなたがち間違つてないんじやないかって、最近の2Bを見てそう思つただけなんですけどね」

「……」

「最近。すぐオペレーター60の話をすることが多くなりましたよね2Bは。去年の2Bはなにかに怯えてるみたいでしたけど、年を越す少し前からそうじやなくなりましたよね。そして60とよく一緒にいるようになつた」

「……」

「バンカーで2Bを見かけるときはほとんど一緒。任務に出てる時も60の話ばつかり。……まるでそれ以外のことを考えないようにしてるみたいに」

「……」

「疑問に思つた理由はそんな感じです。ああ、それと、僕と2Bの関係に気づいたことは司令官にも直接伝えてます。もう2度と司令部に向けてハッキングを試みないと約束させられましたけど。なので今後僕についての処分命令は出ないと思いますよ。よっぽどのことを僕がしない限りは、ですけどね」

変わつた。

変えないって、変えられないって思つていた世界があつさりと。

どうしよう。どうしたらいい。いや、もうどうにもできない。なんで変わったんだ。どうして変えられたんだ。このままじゃ、この世界はどんなエンディングを迎えるんだ。

わからない。わからない。わかるわけがない。

俺がはつきりと覚えてるのは、ゲームが始まるのは1945年。全部が終わるのが9月。だから内容的に原作が始まるのは多分3月とか4月。そんな大雑把な時期と、ゲームの大まかな流れ。

あと数か月。その時間は何も考えずに60と楽しく過ごせるはずだつたのに。俺のせいで流れが変わるとしても、それが表に現れるのは俺が死んだあとだつて思つてたのに。

流れが変わつた。終わりが変わる。

俺のせいで被害が広がる。俺のせいで苦しむ人が増えていく。

やめろよ。こんな、こんな風に、俺のせいで世界が変わるなんてことを、俺が頑張れば救えたかもしれないなんてことを、今さら、俺に見せつけないでくれよ。

「つまり僕が何を言いたいかというとですね。2Bが苦しんでることを解消してあげたいんです」

「……う

「あんなに強い2Bが逃げようとしてるものなんて想像がつかないですけど、微力ながら2Bの力になりたいと思って」

「……がう」

「最初は変な人だと思ってましたけど、今まで何度も助けてもらいましたし、僕も同じヨルハの仲間として助けになりたいと思」

「……違う」

「……えっと、2B？」

「違う」

「その、違うつていつたいなにが」

　違う。違う。違う。違う。違う。違う。違う。違う。違う。違う。違う。違う。違う。違う。

「逃げてない。逃げてなんかない。私はそれを受け入れている」

　そうだ。逃げてなんかない。もう怖くない。怖がる必要なんてないんだから。

「もう一人じゃないんだ。傍にいてくれるんだ。受け入れてくれたんだ」

　60は言つたんだ。ずっと傍にいてくれるつて。一人にしないつて。

だから、だから

「逃げてなんてない！怖くなんかない！私は問題ない！」

「……」

「私はもう笑える！最期の時でもちゃんと笑える！60がいるんだ！もう一人じゃないんだ！」

「……」

「ちゃんと終わりを迎えるんだ！ そうできるようになつたんだ！」

「……2B」

「私には変えられないって！ 救うことなんてできやしないって！ちゃんと受け入れられたんだ！」

やめろ。やめろ。やめろ。

頼む。もうやめてくれ。

「だからそんなこと言わないで、今さら希望を持たせようとしないで！もう諦めたんだ！ちゃんと諦められたんだから！」

だから、もう。

「お願いだから、ほうつておいて……」

お願ひだから、優しくしないで

「……」

「……」

言つてしまつた。確かなことは言つてないけど、明らかに不自然な発言だつた。

もうどうすればいいかわからない。ただ俺は残りの時間を目一杯生きて、楽しく生き
て、そして、笑つて死のうとおもつていただけなのに。

もう、わからない。わからないよ。

「……」

「……僕は」

「……」

「……僕は、2Bが好きだ」

「……いきなり、なにを」

「優しい君が好きだ。頑張る君が好きだ。誰かを思いやれる君が好きだ。僕の話を興味
深そうに聞いてくれる君が好きだ。60のために花を探して回る君が好きだ。仲間を
庇つて敵と戦う君が好きだ。本当に大好きなんだ。

さつきも言つたけど、最初は変な人だと思つた。その次も興味深い人であつて、調査
対象として興味を持つただけだつた。だけどこの数か月君と何度も会う度に、気持ちが
変わつていつた。

2Bはなにか好きなものはあるのか。好きなことはあるのか。どんなことをしたら
喜んでくれるのか。どうしたら笑つてくれるのか。そんな思いがずっと頭の片隅に

あつて、日が経つごとにどんどん大きくなっていくんだ。

だから、だから僕は2Bを助けたい。2Bが好きだから。君が恐れているものから、君が苦しんでいるものから。解放してあげたいんだ。

お願いだ2B。僕に君を助けさせて。君が少しでも僕のことを思つてくれているのなら、僕を仲間だと認めてくれているのなら、僕が君を助けることを許してほしい。君の涙を拭うことを、許してほしい」

「……そんな、こと」

「……2B」

「わた、しは……」

「君が本当に望んでいることを、教えてほしい」

そんなの、そんなの

「……たい」

決まつてる

「……きたい」

『俺』が目を覚ました時からずつと思つてた。

「生きたい。生きていたい。もつとここにみんなといたい」

「うん」

「2Bなら、Eエンドに辿り着けるけど、『俺』ではきっと辿り着けない。
死にたくない。諦めたくないなんてない。本当は私だつて」

「うん」

「なら、流れを変えてみようと思つても、どうすればいいのか、わからない。
『でも、なにも思いつかなくて、なにも、できはしなくて』

「今は僕がいる。僕が一緒に考える」

良くなるかもしねれない。悪くなるかもしねれない。俺のせいで、苦しむ人が増えるかも
しない。

「でも、でもつ」

「それじゃあ、ダメかな」

そう考えるとなにもできなかつた。いずれ必ず来る最期に怯えるしかなかつた。
たつた一人で震えてるしかなかつた。だけど60が一緒にいてくれるからつて、ずっと
縋つていた。もう一人じやないんだつて。恐怖から目を背けていた。

「……」

「お願ひ。2B言つて」

でも、こんな自分勝手な俺を、許されるなら、許してくれるなら

「…………たすけてナインズ」
「うん。絶対に助けるよ」

9Sモデルは優秀なことで有名なんです。

「その、落ち着いた2B?」

「……うん」

「そつか。その、よかつたよ」

「……うん」

「氣まずい。」

ものすごく氣まずい。さつきはつい勢いで思つてることそのまま言つちゃつたけど、やつぱり言わなきやよかつたかな。さつきから2B真つ赤な顔でこっちのことチラチラ見てるし。

おかしいな。今日は別に好きとかそういうことを伝えるつもりじゃなかつただけど……。いやでもあれば仕方ないよね。あんな風に自分のこと卑下して、思つてもいいことを無理矢理口に出してる2Bなんて、見たくなかつたし。うん。しようがない。そういうことにしてよう。いや、だとしても好きって言つた相手と二人つきりっていうのは精神衛生上よろしくないというか

「……その、9S」

「なつ、なに2B!?」

「その……」

「う、うん……」

好きって言つたのは失敗だつた氣がする。いやその気持ちに間違はないんだけど、やつぱりこのタイミングで言うことじやなかつたら。好きだから助けるつてのは逆に言えば好きじやなかつたら助けないつて言つてるようになんじやないか?いや、そういう風にしか聞こえない気がしてきた。いきなり失敗してる氣がするぞ僕。

「……好きって言つてくれた。ほんとう?」

「う、うん。一応本心というか、つい言つてしまつたというか」

「そつか……」

「うん。そう、なんだ……」

「……その、9S。ごめんなさい」

終わつた。

きつい。死にたい。さつきあれだけ2Bに色々言つたくせにこれだ。本当に僕つてやつは……。そりや2Bもこんな奴は好きって言われてもこま
「いまは、答えられないというか、余裕がないというか。多分、いま答えてしまつたら、私は9Sに全部縋つてしまふから」

「え、あ、つまりそれって……」

「9 S が私を助けてくれたあとで、ちゃんと考えて答えを返すから待つてほしい。勝手なことを言つて、ごめんなさい」

「いや、いやいや！全然気にしないでいいよ！その、こんな時に言つた僕が悪いんだし！そうだよ。全部僕が悪いんだから2 B は気にする必要なんて一切無いから。本当に。全然」

「…………ありがとう。9 S」

「ありがとう世界。ありがとう人類。僕と2 B を作つてくれて本当にありがとう。」

「今ならB型並みの戦闘ができる気がする。2 B 並みは無理だけど。」

「それじゃあその、2 B の悩みというか、恐れているもののこと教えてもらつていいかな」

「…………わかつた。ポツド、あなたは外に出てても屋内の声を聞き取ることはできる？」

「可能：当機はヨルハ部隊アンドロイドの随行支援ユニット。各種機能はどのような状況でも対応できるよう搭載されている」

「そう……。機能停止。再起動タイマーを3 6 0 0 秒後にセット」

「了解」

「えつ、ちょっと、2 B？」

「9Sもポツドの機能を停止させて、聞かれるわけにはいかない」
ポツドにも話せない話なのか？

いや。司令部に伝わることを危惧してゐるのか。

「わかつた。ポツド153に命令。機能を停止させ、再起動タイマーをセット」

「拒否：当機は9Sの隨行支援ユニット。任務期間中の機能停止は受諾できない」

「ポツド042よりポツド153。推奨：機能の停止」

「ポツド153よりポツド042。非推奨：機能の停止」

なんかポツド同士で言い争いが始まつたんだけど。大丈夫なのかこれ。

つていうか相変わらず2Bのポツドは変わつてゐるな。普通に考えて153の方が正しいのに。一切の迷いなく機能停止を選んだぞあいつ。
ん？ 2Bどうかし

「ハツキングして」

「へつ？」

「私をハツキングして」

なに言つて、つてかちかいちかいやわらかいかわいい、じやなくてつ！

「な、なんでハツキングを」

「……電腦空間内ならまだ多少は安心できるから」

「安心つて」

「ポツドを止めるのに、さらに外に漏れる可能性を考えてる？そこまでのことなのか？」

「ポツド、終わつた？」

「肯定：ポツド153の停止は完了した」

「そう。ありがとう」

「構わない。……9 Sこれを」

「なんだこれ？真っ黒な球体？これはいつたい。」

「現在ヨルハ部隊技術部が開発を行つて いる電波遮断装置。 ブラックボックス反応も一定時間の間感知不可能にすることが可能」

「なつ。そんなものが開発されたなんて話聞いてないぞ」

「……？ 私そんなの持つてたつけ」

「現在所有しているこれは使い捨ての試作型。当機が2Bの名前で使用申請許可を得ている。処分は受ける」

「ううん。いいよ。……ありがとうございます」

「……機能を停止する。9 S。あとは頼む」

「勝手に2Bの名前を使って、勝手に2Bが知らない道具を手に入れて、勝手に本人が望んでいないことをする随行支援ユニットか。」

「いいやつですね」

「うん。……いつも頼りっぱなし」

さて、それでは

「いきますよ」

「うん」

ヨルハ機体2号B型を対象にハッキング開始。

「その……、大まかな流れはそんな、感じ……」

「なる、ほど……」

2Bの抱えているものについては粗方聞き終わつた。
一言で言えば、理解できない。これに尽きる。

2Bは未来の大まかな流れが分かると言う。なぜそんなことが分かるのか？ 答えられない。

2Bは司令官さえ知らないことを知つてていると言う。なぜ知つてているのか？ 答えられない。

ハツキリ言つて論外だ。新手のウイルスの可能性も考えられる。

けど

「信じるよ」

「えつ……」

「信じるよ。 2Bのこと」

僕は彼女を助けたいと言つた。

彼女は僕に助けてと言つた。

信じる理由はそれだけで十分だ。

まあ、さすがに裏付けは取らせてもらうけどさ。それは許してほしい。特にヨルハ計画の正体とかはちゃんと確認しないといけないし。2Bも言つてたけど間違つてる可

能性もあるらしいしね。その辺は後でこつそりやるさ。

とにかく、今聞いた話の中でまず解決しないといけないのは

「バンカーが墜ちる、か」

「うん。私たちの家が消えることになる」

「それによつて、各個体の自我データを保存してるサーバーも破壊され、ヨルハ機体は義体の機能が停止してしまうと巻き戻れず、本当に死んでしまうと」

「そう」

そしてそれは、今年中に起きる。正確には9月より前に、か。

さすがに解決するにはいくら何でも

「時間が足りない……」

「…………めんなさい。私がもつとはやく相談してたら」

「えつ、あ、いやいや、2Bはなにも悪くないよつ！全部敵のせいなんだから2Bは気にしなくていいんだよつ！本当に」

「…………うん。ありがとう9S」

そうそう。2Bはなにも悪くなんてないんだから。そんな顔しないでほしい。つい口を滑らした僕が悪い。もつと言えばヨルハ計画を考えたやつが悪いんだ。

でも、どうか。バンカーが墜ちてバツクアップが消滅するのか。でもそれってつまり

「バンカーにあるバツクアッピングを他の場所。それこそ月面のサーバーとかに移動させる
ことができれば、とりあえずは解決するのかな?」

「……」

「どうかな? とりあえず今思い浮かんだのはそれぐらいなんだけど」

「……」

「えっと、さすがに簡単すぎたかな。こんな方法じやいくらなんでも無」

「9 S!!」

なつ、いきなりどうし

「そう! それだ! -すごい!! やつぱり9 Sは頭いい!!!」

「ちよつ、2B、揺らしすぎつ、てかあたつて」

近い柔らかい暖か、くはない。ちくしょう! なんでここは電腦空間なんだ!? なんで現
実じやないんだ!?

「とつ、とにかく落ち着いて2B。まだなんとかできるって決まつたわけじやないんだ
し」

「どうして? それで全部解決する気がするけど……」

「いやいや、僕が敵だつたらいきなりバツクアッピングの保管場所を移動したら不自然に思
うし。作業が終わる前に仕掛けるよ」

「……そつか」

シユンとしてる2Bかわいい。

違う。そうじやなくてなんとかする方法だよ方法。やばいな。告白してから僕の思考回路どこかイカれたんじゃないかこれ。あとで自己ハツキングして確認しよう。

「でも、移動することができればなんとかなりそうだね。一応確認するけど、月のサー
バーにはさすがに敵も潜り込めてないんだよね?」

「確か……。そんな描写はなかったと、思う。はず。うん……」

「となれば秘密裏に移す方法か。さすがに今すぐは思いつきそうにないから、また次の
時に一緒に考えよう。ポッドもそろそろ再起動する時間だしね」

「うん」

起きたらまずは、任務をパパッと終わらせないと。残されてる時間は少ないからすぐ
にでも色々確認しないといけないし。場合によつては司令官に話す必要も出てくる。
そのための説得の証拠になるものも手に入れないと。敵がバンカーに侵入してると
ると動きづらいけど、なんとかしてみせる。

「9S」

「なに、2B?」

「助けるつて言つてくれて嬉しかつた。ありがとう」

「……ううん。仲間を助けるのは当たり前のことだよ。2B」「……そつか。そうだね。ありがとう」

やつぱり2Bは笑顔のほうがかわいいな。

さて、優秀な9Sモデルの実力、發揮するとしましようか。

N i e R : A u t o m a t a

俺の大号泣大暴露事件から2か月が経過した。

今日の日付は3月9日、時刻は22時。場所はバンカーの司令室。
そんなどこで何してるかつて？司令官のお話聞いてる。

「以上が第243次降下作戦の内容だ。なにか質問はあるか？」

「敵戦力の予測が随分曖昧なようですが？」

「エリア一帯にはジャミングが掛けられていて敵の反応が衛星軌道上からでは観測しづらい、よつて作戦エリアには既にスキヤナータイプが単独での潜入調査を行つている」「その調査結果は確認できないのですか？」

「先ほど説明した以上のデータは送られて來ていない。ブラツクボツクス反応が未だ健在であることから、なんらかの不測の事態に陥つたと予想される」

マジか。大丈夫かな9S。

お話をいうか、正確にはこれから向かう作戦についてのブリーフィング中です。

作戦内容を簡単に言うと、敵陣地に突つ込んで秘密兵器破壊してこいみたいな感じ。
まあつまり、ゲームでの最初の戦闘。チュートリアル。体験版で無茶苦茶遊んだあの

場面。アクション苦手だからぎやーぎやー言いながら遊んでたなあの頃は。まさか当事者になるなんて思つても無かつたからベリーハードで気楽に死んでたし。

それはともかく、ついに始まる。NieR : Automataが。

俺がずっと恐れてた、終わりの始まりが。

「なるほど……。ではこの人選の意味は何でしようか？これまでの戦果を比べれば私ではなく、そちらの2Bが隊長となり、他を率いるべきかと思いますが」

「……確かに成果だけを考えれば彼女が適任だが、味方を率いての作戦となれば2Bではなく、1D。君の方が相応しいと私がそう考えた結果だ。この答えでは満足できないか？」

「いえ……。お答えいただきありがとうございます」

あ、嘘ついた。絶対成果云々じゃなくて俺に任せるのが不安なだけだろうに。わかるけどね。俺だったらこんな最低限のことしか喋らないやつの下につくとかちょっと怖いし。あとなぜか周りにはバレてないけどバカだしな。

にしてもやっぱわかりやすいな司令官。本当に癖直さないとそのうち皆に嘘ついてるつてバレるぞ？そういうえば最近ひどい顔して自室に帰つてつたつて聞いたけど、大丈夫だろ？今日も普段よりちよつとだけ顔色悪いし。

「だが、1Dの言うことも理解はできる。2Bの戦場での経験はこの場にいるどのヨル

ハ部隊員よりも多いのは事実だ。よつて2B。おまえには今作戦での副隊長を命じる。経験を活かし他の隊員のサポートを行え

「……了解」

うへえ。まあ、しようがないか……。

未だに俺が強いつて言われるのは納得できないけど、あまりやられてないのは事実だしな。ちょっと心配だけど頑張ろうか。

「他にはないか?……よろしい。では各自戦闘準備を終え3時間後に出撃しろ。1D頼んだぞ」

「はい。了解致しました」

「人類に栄光あれ」

「「人類に栄光あれ」」

さて、準備しますか。

とりあえずもう一回さつきのデータを確認するのと、過去の現場付近での戦闘データの分析だな。まあ、やるのは俺じゃなくて60とポッドだけど。

「あのー」

別に働いてないわけじやなくて、B型の俺より60達の方がそういうのが得意だつてだけで、サボってるわけじやない。本当だぞ。

「えっと、もしもーし
60達に任せてる間に俺も回復薬とか消耗品の補充をしてるから。分担してるだけ
だから。

「あのー！すいません！」

「つ？……私？」

「あ、ごめんね。大声出しちゃって。えっと、今回ご一緒させてもらう4Bです。一度挨拶しておこうと思つてて、よろしくね！」

「そう……よろしく」

ビックリした。心臓止まるかと思つたわ、心臓ないけど。

挨拶、ね。たまにそういうのやつてる人は見かけるけど、俺にもする人は珍しいな。
あんまり周りからいい目で見られてないし、俺。

「……それじやあ」

「あっ、うん。ごめんねつ。呼び止めちゃって……。じゃあ、またあとでね！」

なんていうか、すごい元気な子だつたな。前の俺のタイプど真ん中つて感じ。

「あんな子、B型にいたつけ？」

「ヨルハ機体4Bは、23日前に本人希望によりH型から装備転換されている」
「Hから？珍しいね」

なるほど、通りで見ない顔と名前なわけだ。

つてそんなことは置いといて、はやく60の所に行かないと。

「あー、緊張した。やっぱりクールでかつこよかつたな。2Bさん」

「大丈夫ですか？回復薬はちゃんと持ちました？データも覚えてますか？困つたらすぐに連絡してくださいね。こつちに繋がらないときはポツドに相談するんですよ」

「大丈夫。わかってる」

大丈夫。大丈夫。

回復薬だと思ったら、自壊用ウイルスだつたとか。ポツドとはぐれちやつて迷子になつたとか。1年目はよくあつたけど、最近はあまりないから大丈夫だつて。多分。あの時は司令官に半日ぐらい説教されたなあ。

「もう。本当に不安なんですから2Bさん。結構おつちよこちよいなのになぜかクールとかかつこいいとか言われてて、いつもわたしどういう顔したらいいかわからないんですからね」

「……怖いとか危ないじゃなくて？」

「はあー、最近はそういう風に言われてないんですけど俺。さつきすれ違った子にも変な目で見られてたんだけど俺。」

「今の9Sさんとよく話すようになつてからは本当に落ち着きましたし。前みたいに、その、暴走とかも、しなくなりましたから。今じゃ仕事のできるクールビューティらしいですよ。みんなの中では」

「へー」

仕事のできる、クールビューティ？

みんな節穴なんだろうか。

「もー。ほんと本人が一番わかっていないんですから。9Sさんも苦労しますねこれは」

「べ、別に9Sは関係にやい」

「……今囁みました？」

「……囁んでない」

「囁んでないつたら囁んでない。2Bは囁んだりしない。」

「とにかく、行つてくる。」

「……はい。気を付けて、いつてらつしやい。2Bさん」
いっべきます。60。

『こちら隊長の1D。各員状況を報告しろ』

『これからどういう風に動けばいいか。9Sは詳しく述べてくれなかつた。』

『こちら11B。問題ありません』

『なんでも、まだ調べないといけないものはあるけど、俺は好きに動いていいんだつて。
大丈夫なんだろうか、俺色々やらかしそうで怖いんだけど。』

『12H。私も大丈夫です。すぐ行けます』

まあでも9Sがそう言うつてことは大丈夫なんだろう。頭いいし、俺の行動も全部お見通しなのかもしけないな。さすが9S頼りになるぜ。

『こちら7E。当然問題ありません』

とにかくまずはこの作戦成功させないと、司令官も9Sになんかあつたかもつて

言つてたし。

『あつ、はい。4Bも大丈夫です。問題ないです』

そうだよな。助けてもらうんだから、俺も助けてやらないとな。仲間が困つたときは助けないといけないしな。うん。頑張ろう。

「こちら2B。問題なし。出撃準備完了」

以前の俺ならともかく、今の俺にできないことなんてない。いや、多分あるけどそれぐらいの気持ちでいるってことだ。もうなにも諦めないって決めたんだから。

『よし。全員問題ないな。この作戦は地球を奪還するための大変な一步目だ。そして我々は司令官に作戦を遂行できると選ばれた精鋭だ。この作戦に失敗は許されない。全力で任務に当たれ』

目指す未来はただ一つ。

26個のエンディング。それを越えた27個目。ご都合主義のハッピーエンド。

『副隊長。戦場に向かう前になにか皆に助言などはないか?』

俺がバカやつて、ポッドが止めて、60が心配して、司令官が怒つて、9Sが笑つてるそんな世界。

絶対に辿り着いて見せる。なにがあろうとも。絶対に。

その手始めに、まずは

「全員でバンカーに帰還する」

「これくらいは出来ないとな。じゃなきゃ世界なんて変えられやしない。」

『……ふつ、ふふふ』

「……1D?」

「ど、どうしたいきなり笑つて？大丈夫か？悪いもんでも食べたか？」

『いや、なに。ただ噂なんてものは当てにならないと思つただけだ。2B、君を笑つたわけではないんだ。すまないな』

「別に、気にしてない」

「お、おう。別にいいけど。噂つてクールビューティだとかなんとかつてやつだつけ？やつぱそんなんじやないつて今のでわかるのか、すぐえな1D。さすがお姉さまと呼びたい人ナンバー1。60が聞いた話ではそちらしい。大丈夫かヨルハ部隊。」

『さて、副隊長の宣誓は置いといて。改めて、これより第243次降下作戦を開始するよし頑張るか。こつから始まるんだ。諦めてた俺の、いや、私の世界を守るために。』

『全機出撃！』

全ての存在は滅びるようデザインされている。

生と死を繰り返す螺旋に……

私達は囚われ続けている

これは、呪いか。それとも、罰か。

知ったことかバーカ！呪いでも罰でももうどうでもいいっての！全部まとめて蹴つ
飛ばしてやる！ヨルハ最強舐めんじやねえぞ自信ないけど！！

ただ、考えるのは9Sに任せます。戦うのは頑張るから許して9S。
というわけで

「2B。出撃する」

NieR: Automataならぬ

にーあおーとまたの始まりだ！

あ、待つた。この作戦つて誰か脱走しようとしてたんじやなかつたつけ。いきなり躊
いてる気が。

A D : 1 1 9 4 5 0 3 1 0 ↗

ポツド、おまえつてやつは

『バンカーより2Bさんへ。飛行ユニットの降下地点を設定しました。レジスタンスのキヤンプよりちょっと離れた場所なんですが……敵への情報漏洩を防止する為なので我慢してください』

「了解」

おつけーおつけー。別にいいよそんぐらい。

実際場所漏れて強襲喰らって拠点が無くなるなんて事例は今までいくらでもあるわけで、そんぐらいしようがないって。

『がんばつてくださいね!』

めっちゃ頑張る。

今回の任務自体はそこまで気合入れるようなものでもないけど、これから起ることを考えたら全力で行かないといけないしな。

そんなこと考えてたらもう降下地点か。それじゃ、ちゃちゃっと降りますか。
さて、なんとか今回は無事に着きましたね。レジスタンスキヤンプまでのマップデータ

タは僕が既に受け取つてますから、ここからは僕が先導しますね」

「お願ひ」

「お願ひされました。それじゃあ、行きましょうか」

「いざ行かん！初めての廃墟都市へ！」

「……」

「うわ、データで知つてはいましたが、思つた以上に緑化が進んでるみたいですね」

「……」

「元は大勢の人類が暮らしていた大都市だつたみたいですが、今じゃもう動物ばかり
みたいですね。あれ見てくださいよ。下にいっぱいシカいますよ」

「……」

「……2B？」

「なんていうか改めて実感が湧いてきた。

画面越しに見た世界にいるつていうのと、この場所で始まるんだなつてことを。

本当に今さらだな俺。

「……9S」

「はい。なんですか？」

「キャンプの前に水場はある？」

「はい……？」

「キャンプの前に水場はある？」

「えーっと、あるみたいですけど……」

「そう……」

よし。こつちはゲームと一緒に。良かった。この前の工場廃墟は全然別物過ぎて大変だつたしな。

え？ なにがどう大変だつたって？ まあ、なんだ一言で言うと

迷子になつた。

いや、違うんだ。言い訳を聞いてくれ。

『俺』の頃。「ベリーハードでやつてやるぜ」って言つて2時間あの工場廃墟までのシューティングをやり、「ハードなら余裕だし」と3時間エンゲルス君までのタイムアタックをした。

結果？ Eエンドまでノーマルで行きました。

とにかくそれぐらいやつてたんだ。あれから『私』になつて時間も経過したけど、マップは覚えてるから行けると思つたんだ。ただ実際にはもつと広かつたつてだけで。そりやそうだよな。ゲーム同様のサイズしかないわけないよな。バンカーも実際はすげえ広かつたわけだし、こうなつてるのは当たり前だよな。考えればわかることだつ

てのに。

「警告：ヨルハ機体2Bは現在レジスタンスキャンプでの情報収集任務を命じられている。釣りなどといった娯楽に興じる時間は設けられていない」

「……なんでいきなり釣りの話？」

「推奨：任務の……」

「……？」

「どつたよ。いきなり喋つたと思つたら黙つたりして

「疑問：先ほどの9Sに対する質問の意図」

「私の持つてるデータと合つてるかどうか確かめたかつただけだけど？」

「……」

「……ポッド、まさか」

「まさか、お前

「ついに釣りに目覚めたの？」

「…………理解不能」

「緊張感、魚との駆け引き、釣れた時の感動。ついにわかつてくれたんだポッド」

「否定」

「大丈夫。言わなくても釣りがしたいって気持ちは伝わってる」

「否定」

「うん。だからまずは任務をこなして時間を作つてから釣りをしよう。それまで一緒に我慢しよう、ね？」

「拒否」

そうかそうか。ついにポツドも釣りの楽しさに気づいたのか。

そんなに恥ずかしがつて必死に否定しなくてもいいのにな。全く。目と目で通じ合う仲だろ俺達。9Sの前だからつて隠さなくともいいんだぜ？

つて、おい。どこ行くんだよ？勝手に移動するなつてば。また迷子になつたら誰が俺を案内してくれるんだよ。延々と一人で彷徨つちまうぞ？

ちよつと？もしもーし？置いてくなよ！」

「……ちよつとポツド042に同情するよ」

「……同意」

ポツド？待てつて、おーい。

「私の名前はアネモネ。この辺り一帯のアンドロイドレジスタンスを取りまとめてい
る」

知ってる。ゲームではお世話になりました。

「バンカーから話は聞いている。このエリアの調査担当になつたらしいな」

調査するのは主に9Sだけどな。俺はウロチョロするしかできないし。

「最近は敵対行動を取らない個体も確認されているが、依然として攻撃をしてくる機械
生命体の方が多いのは事実だ」

この時期、敵のネットワークから離脱する個体が増え始めてるんだもんな。理由は

ちゃんと覚えてないけどさ。

「情報は私よりも他の連中の方が詳しいだろう。話は通しておくから好きに動いてくれて構わない」

助かるな。安心できる拠点があるのって精神的に落ち着くし。

これから長い間お世話になるから、本当によろしくな。

ところで、俺達の事皆に説明するのに時間かかりそう？それならちよつと表で釣りしきていい？

「皆っ！少し耳を貸してくれ！」

「っ、大声でいきなりなにを

「ここのにいる二人は、以前までいた42Sの後任として新たに送られてきたヨルハ部隊員だ。これから共に――」

話を通すつてそういう。

まあそれが一番手つ取り早いしな。皆のこっち見る目それだけで変わったし。さつきまで不審者見るような目で見てたくせに。

っていうかさすがリーダー。仲間に信頼されてるというかなんというか。

ゲームじや特に活躍する場面なかつたけど、舞台見た後で印象がガラツと変わったのはよく覚えてる。それは司令官もだけど。

性格変わりすぎというか、成長したというか。これまでの過ごしてきた時間想像して泣いたというか。

「——助けを求められたときは協力してやつてくれ。もちろん我々が困ったときにも同じように手を貸してくれる筈だ」

そりやもちろん。助けてくれるんだから、こつちも助けるつて。そもそも敵じやなきやよっぽどでもない限りは誰だつて助けるよ。困った時はお互いや様つてね。

「話は以上だ。聞いてくれてありがとう。各自仕事に戻つてくれ」
いや、なんていうか助かるなほんとに。

「ありがとう」

「ん？　いや、感謝されるような事ではないさ。当たり前の事を伝えただけだからな。それに新しい仲間が出来る度にやつてている事もある」

「それでも、ありがとう」

いやいや、安心できる拠点があるかどうかって一番大事だし、なにより仲間がいるのつて心強いしな。まあ、今の9Sと仲良くなるまで基本ぼつちだつた俺が言うことじやないけど。

「……そうか。では感謝してくれると言うなら、何かあつた時は存分に力を貸して貰う

としようか」

「任せて。どんな状況でも解決してみせる。9Sが」

俺は肉体労働担当だからな！」

「最近2Bが何を言い出すか、少しづつ分かつてきた気がする……」

マジか。以心伝心つてやつ？ ちょっと嬉しいかも。

でも、俺は9Sの考えてる事あんまりわからないけどな。なんでわかるんだ？ 「はははは。なんとなくだが君たちの事がわかつた気がするよ」

「そう……？」

「まあ、2Bの事は伝わったと思うよ……」

「そう……？」

なんか分かるような事したか俺？

「改めて、これからよろしく頼むな。2B。9S」

「よろしく、アネモネ」

「こちらこそ、よろしくお願ひします。アネモネさん」

さて、それじやあ早速周りに聞き込みしようか。確かゲームだつたらサブクエとかあつたはずだし。ちよつと後味悪いやつだけど。

自己紹介と調査も兼ねて、お手伝いといこうか。

「ハツ！」

飛び上がり、直上から敵を槍で貫く。

目視ではもう敵は見当たらないけど、とりあえずこれで全部かな。

「ふう……。9S集まつた？」

「2、3、4つと、はい。道具屋さんと武器屋さんに頼まれた部品は、これで全部揃いました」

「よかつた。やつと終わつた……」

「そうですね。なかなか時間がかかりましたからね」

ほんとだよ。ゲームだつたらサブクエのチュートリアルだからあつという間に終わるのに、実際には3時間くらいかかつたからな。ちょっと疲れた。

「それじゃあ、戻りましょうか。補給したあとに次の調査地点を決めないといけないで

すから」

「……次の場所なんだけど」

「ええ。砂漠ですよね。僕もキャンプを出る前に少し聞きました。砂漠地帯で凶悪な機械生命体が多く出現しているらしいと」「そう、なんだけど。出来たら」

「出来たら?」

その話は聞いてるんだけど、その前に

「出来たら、工場廃墟に行きたい」

「工場廃墟、ですか。この前の作戦があつたあの場所ですか?」

「そう」

「何か気になる事でもあつたんですか?」

「……頼まれたから」

あんまり気は進まないけどな。

「頼まれた? レジスタンスの人ですか?」

「ん? ああ、違う違う。そつちじやなくて

「バンカーで16Dから……」

「16D? 前回の作戦には関わってない方ですよね。何を頼まれたんですか?」

「16Dは11Bが指導官をしていたらしい。頼まれたのは撃墜した11Bの遺品回収」

「それは……」

仲間の死体を探すつてのもそうだけど、なによりも、頼まれたことでゲームでの11Bを思い出したからこそ、あまり気が進まない。

11Bはゲームでは作戦時に脱走を試みていた。撃墜を偽装してそのまま逃走。そして逃げている最中に死亡した。選択肢によつてはすつごく苦い気分になるサブクエだつたはずだ。

「……2Bはよくやつたと思います。1D、4B、7E、そして僕達2人。あの状況で5人も生還する事が出来たのは2Bのおかげです」

「……でも、11Bと12Hは墜ちた」

「大気圏突入後すぐに攻撃を受けた例はあまり多くはないですが確かにあります。ですが、大気圏突入中にレーザー狙撃をされる、なんて事例は今まで一度も確認されていません」

前回の作戦。第243次降下作戦で俺達は地球に降りてる最中に敵の攻撃を喰らつた。

一瞬で12Hが、12Hだったモノに変わり、視界から通り過ぎていく。

すぐに集団から突出することで俺が長距離砲撃の回になり、その間に残った1D達が施設内に突入する事にしたんだけど、他の皆は飛行型の敵集団に攻撃を受けてしまい、11Bはその際に撃墜された。

「でも、私は……」

「あの後、2Bが作戦前に何を言つたのかは聞きましたが、あの状況では全滅の可能性も十分にあり得ました。それを避ける事が出来ただけでも、誇るべき事です」

わかつてはいるんだ。

本来なら、突入部隊の壊滅。そして唯一生き残つた2Bと9Sのブラックボックスの暴走による超大型機械生命体の破壊。生還者はなし。

この世界ではそうは成らず、突入部隊4人と調査を行つていた9Sの計5人が生き残つた。喜ぶべきことだ。世界を変えることに成功したんだから。でも、2人死んだ。

「2B」

「……なに？」

「後悔も反省も良い事ではあります、引きずるのは違うと思います」

「……そう、だね。ごめん。ありがとう」

そうなのかもな。いつもそれでドツボに嵌つて自己嫌悪のループに入つてる気がす

るし。

そうだな。いい加減切り替えないとな。

目標であつた世界を変えるつてのは一応成功したわけだし。これはつまりエンディングも変えられる可能性も見えてきたつて事だからな。

そもそもI—I Bも死んでること前提で考えてるけど、もしかしたら脱走に成功していまも生きてるかもしれないしな。もしそうだつたら嬉しいな。そうなつてたら、それも世界が変わつたつて事の証明になるし。

「それじゃあキャンプに戻る前に行つちやいましようか。こういうのは手早く終わらせるに限ります」

「……ありがとうございます。付き合つてもらつて」

「いいんですよ、これぐらい。仲間じやないですか」

「そうだね……ところで9S、一つお願ひしたい事があるんだけど

「あ、はい。なんですか？」

「これだけは言つておかないといけないしな。

「道案内よろしく」

「あ、はい」

もう迷子はこりごりだからな！

いい作戦だと思ったのに……

「アンドロイド、コロス！」

「コロス！ コワス！」

「アイシテル！ コロス！」

「ウラミ！ ツラミ！ ブチコワス！」

コノママジヤ、ダメ【

「エノママシヤ」ダメ

二ノマニシヤ

二二八ノシナタス

卷之三

卷之三

۱۴۰

ヨリヤマジアズムヨリ

ダメコノママジヤダメ

ダメコノママジヤダメ

腕を、足を、頭を振りながら機械生命体がひたすら同じ言葉をつぶやき続ける。

俺達の周りにいる何十何百という機械生命体が同じ言葉を延々と繰り返す。

そしてその全ての機械生命体が、他の個体を登り、固まり、繋がっていく。

そうして、宙に繭が生まれた。

「うわあ……」

思つてたより不気味だなコレ。ゲームでもキモいとは思つたけど。生で見ると更に気持ち悪いな。

——2B

「わかつて。撤退の用意だけしておいて」

「了解です」

心配しなくてもさすがに大丈夫だつて。

いくら気持ち悪いからつていつまでもボケつとしてたりしないからさ。今いるここは砂漠地帯にある、マンモス団地奥の縦穴空洞。その内部。砂漠から逃げた機械生命体を9Sと追つかけてきた此処まで來た。

そして、待ち構えてた大量の機械生命体と戦つてたらこの状況。なにも知らなかつたら普通に怖いわ。

少なくとも人間だつた時にこんな状況に遭遇したら確実に漏らしてる自信がある。まあそんな事はどうでもいいか。とにかく、ここからだ。

そろそろ、上の繭も開いて中身が落ちて——

——

うわあ。痛そう。今あれ頭から落ちたぞ。

いや、機械生命体だし、大丈夫だろうけど。

俺だつて2Bボディだからダメージには強いけど、あの高さで頭から落ちるのはちよつと嫌だな。

「アンドロイドではなく、人型の」

「……機械生命体」

「——」

特殊個体アダム。

高い背丈に、白い長髪。

鍛えられた身体と、整った顔立ち。

機械生命体との長い戦争の中で、初めて確認されたアンドロイドと似た質感を持つ人型の機械生命体。機械生命体同士で共有するネットワークでの基幹ユニット。

ゲームでの立ち位置は中ボスになるのかな。

それが産み落とされた瞬間にプレイヤーは立ち会うことになる。

つまり、今だ。

ゲーム的に言えば、アダムは産み落とされた時はレベル1だ。

レベル1だからもちろん弱い。

というか、攻撃してこない。

だが生まれた直後に攻撃してくるプレイヤーと戦いの最中で、どんどんレベルアップ

していく。

つまりはこつちの動きから学んでいくわけだ。

攻撃を続けるうちに、こつちの攻撃を躱し、反撃をしてくるようになる。文字通り、1秒ごとに進化していく。

これから俺は新しいエンディングを作るために、原作とは違う事をしていかないといけない。

アダムはゲームでは前半で退場する存在ではあつたけど、その力は大きい。なら、その力を利用したいと思うのは誰だつてそうだろう。

「……」

「……2B? どうしました?」

アダムはこれからどんどん強くなつていく。

だから、安全にアダムになにかをするなら、今この瞬間しかない。

「……」

「——」

「……んにちは」

「——」

「は? 2、 2B?」

作戦はこうだ!

見た目は大人だが中身は産まれた直後、つまり赤ん坊のアダムと仲良くなる。あとこの後産まれるイヴとも仲良くなる。

成長したアダムとイヴともそのまま友好関係を続ける。

基幹ユニットとしての力を借りてラスボスのN2をなんとかする。9Sもハッキングでなんか頑張る。

あとポッドも頑張る。

俺もなんか戦つて応援する。

そして勝つ。

どうよこの作戦。

ゲームではポッドがなんとかして、N2倒したけど。

それに加えて、アダムにイヴ、9Sがいればなんとかなるだろ。多分。

「はじめまして」

「」

「ちょッ！ 本気ですか2B!？」

「なにが？」

「なにがって、敵ですよ!?」

「廃墟都市で何もしてこない機械生命体がいるのは、昨日確認したはず」「いや、確かに確認しましたけど、そいつが出てきた上のやつらにさつきまで攻撃されたんですよ!!」

大丈夫大丈夫。

心配なのはわかるけど、今なら問題ないって。

だいたい昨日やりたい事があるって話したら「いいよ」って言つたじやん。

「……昨日の件」

「あれは！——こんな事だなんて思つてなかつたからですよ!!」

ほんと心配性だな。9Sは。

大丈夫だつて、こつちから攻撃しない限りはなんもしてこないんだから。ほら今だつて大人しくこつちを見て腕を振り上げて——

「アンド……ロイド……」

あれ？

「なにか言うことはありますか?」

「……ないです」

現在レジスタンスキャンプで借りた俺達の部屋にいます。
もつと言えばハツキング空間にいます。

絶賛お説教中です。

「確かに事前にあのアダムとかいう機械生命体の事は教えてもらいました。

2Bがちょっとしたい事があるという話も聞きました。

それに対してもちやんと内容も聞かずに許可を出しました。

だとしても、あんな事をするなんて予想外にも程があります！」

あの後は結局戦闘になり、ズシヤアってやつたらバンツってイヴが生まれた。
おかしいなあ。アダムって攻撃しない限りはなんもしてこなかつたと思つたんだけど
ど、勘違いだつたんだろうか。

まあ、それはともかく改変は出来なかつたけど、ゲームと同じ展開になつたから良し

としよう。

「なんですか仲良くなつてなんとかするつて！」

なんか頑張るつてなんですか!?

いくらなんでも考えなさすぎです！」

良しとしたかつた……。

「…………」の前9Sが、私はちょっと悲観的過ぎるつて言つてたから

「今度は楽観的過ぎるんです！」

……もう、わかりました。

色々やらなくちゃいけない事は山積みですが、まずは2Bですね」

待つて

「今回のこれは2Bのその致命的なポンコツを直すいい機会です。

60さんにも言わせてましたし、徹底的にやりましょう」

待つて

「まずはその考え方からですね。

とにかく、これからはなにか思いついたらすぐ相談を——

この後6時間ほど続いた。

難しい事考えるのは任せた！

「ポッド！ データ照合！」

「了解……。」

報告：データ一致

「なら、これは本物の……」

——ついに、見つけた。

この3年間任務先で色々探してみたけど、全く見当たらなかつた。
本当は無いんじやないかって、思いもした。

だけど、今、確かに目の前にある。

やつと、見つけた。

——月の、涙

くうく。

やばい。感動してちょっと泣きそう。

この3年間で3番目くらいに嬉しいかもしない。

「あー、あのですね。2B？」

「ポツド、撮影モードに移行」

「了解：ポツド a での画像撮影。 b での動画撮影。 c でのライトアップを開始する」

「あノ、村コツチコツチ」

「壁が邪魔だな……」

「非推奨・周辺の破壊は対象に傷がつく可能性があり、環境の変化により枯れる可能性もある」

「それもそうか。」

「この隅っこにあるからここまで育つたかもしれないんだもんな。」

「残念。全方位からしつかり写真撮りたかつたんだけどなあ。」

「……ポツド、次、ライトを下から当てる」

「了解」

「不満はあるけど、発見した喜びが勝るから問題なし。」

「ふつふつふ。」

「60 喜ぶだろうな。なんたつて幻の花だからな。」

「きやー、2Bさんステキー。」

「とか言われたり、抱きしめてきたりしちゃつたりなんかして。」

「ポツド、次は引きで撮って」

「了解」

今度、バンカーに帰った時にサプライズプレゼントしてやるぜ!
楽しみだなあ。

「……」

「……」

「……めん。2Bが落ち着くまで待つてもらつていいかな?」

「ウン。村には遅レルツテ連絡シテオク……」

「これを持つていってください」

「これは……?」

「アネモネさんに頼まれていた、燃料用の濾過フィルターです。
渡していただければ、私達が平和的な種族である事を理解していただけると思いま

す

「……わかった」

オッケー。パスカル任せてくれ。しつかり渡してくるよ。

今回はすぐ帰るけど、次来たときは折角だし子供たちと遊びたいな。

それじゃあ早速戻ろうぜ。9S。

「そうですね。真っすぐに、寄り道せず、最短で、最速で、戻りましょう」

「う、うん」

ど、どうしたんだろう。9S。

そんなに急いでキャンプに帰りたがるなんて……

キャンプになにか急ぎの用事でもあるんだろうか？

まあ、そういう事なら急いで帰ろうかな。

いつも助けてもらつてるし、たまには俺が9Sの助けにならないとな。

持ちつ持たれつってやつ？

キャンプ戻つたら9Sの用事済ませて、そして今後の話でもするかな。どういった形

で立ち回っていくのかとか、ちゃんと相談しないといけないし。

これからイベント目白押しからな。

『オペレーター60より、2Bさんへ。定期連絡の時間です』

あれ、もうそんな時間だつたつけ？

一体いつの間にそんなに時間が経つてたんだ？

「こちら2B。問題なし」

『それなら良かつたです。さつきまで遊園施設にずいぶん長い時間留まつてたかと思つたら、今度は急に森に向かい始めたから何かあつたんじやないかつて、ちょっと心配してたんですよ？』

その近辺で多数のアンドロイドが消息不明になつたつて聞いていましたから』
本当に60は優しいな。

ちょっと月の涙の撮影に時間がかかつたぐらいで心配して——

「——別に何もなかつた。うん。問題なし。大丈夫」

『えつ、なんですかその反応？ 2Bさん、今度は何をやつちやたんですか？』
やつべえ、サプライズするつて決めたんだから。なんとか誤魔化さないと。
こう、俺の華麗な話術でなんとか別の話題に持つて行かないと。

「60！ メールに書いてた木星占いについて聞き——」

『——ポツド、2Bさん今度は何したんですか？ また始末書ものですか？』

ポツドに聞くのは反則じやないかな！

俺ともつと楽しいおしゃべりしようよ60！

ポツド、ポツド！

わかつてゐよな。大丈夫だよな。サプライズだぞ。どつきりなんだぞ。
さすがにわかつてゐよな。頼むぞほんとに。

「…………報告：ヨルハ機体2Bは遊園施設にて平和的な存在と自称する機械生命体の
集団と遭遇。

この機械生命体はレジスタンスとの間で物々交換を行つてゐるところ。

現在は確認の為、キャンプへの帰還を目的としている」

『平和的な機械生命体……ですか？ 最近各地で報告されている攻撃してこない個体で
はなく？』

さすがだぜ。ポツド。

信じてたよ。きっと上手く誤魔化してくれるって信じてたよ俺は。

「そう、それ。

まだちゃんと確認取れてないから、報告できなかつただけ。

うん。ほんと。それだけ」

ほんとほんと。2B嘘吐かない。

『…………はあ。わかりました。今はそれで説得されちゃいます。

でも2Bさん、危ない事は極力避けてくださいね。

わたし、本当に心配したんですから』

「……わかった。心配してくれて、ありがとう』

『どういたしまして。あんまり心配かけさせないでくださいね?』

それじゃあこれで、定期連絡を終わります。

あ、あと木星占いはなんか嘘だつたみたいですね。ええ。嘘に決まっていますあんなの。

それでは、失礼しますね』

あー。

60 マジ女神。

なんていうか自分の事を誰かが心配してくれるって、なんか嬉しくなるな。

60と喋るとそれを強く実感できる。

9Sもそうだけど、なんでこう俺が嬉しくなるような言葉を的確にかけてくれるんだ
ろうな。

それだけで、なんか頑張ろうって気が湧いてくるし。

……きつとういうのは俺だけじゃないんだよな。

地上で戦ってる戦闘員も、軌道上で情報支援してるオペレーターも。皆。

辛い時とか苦しい時に、『頑張れ』って言つて言われて。

元気になつたりしてるんだろうな。

まあ、さすがに俺並みにメンタル弱いやつはそうそういないだろうけども。やつぱり、そういう事を思うと

「——死なせたくないな」

守りたいな。

地上にいるヨルハも、バンカーにいる皆も死なせたくない。

最後にヨルハは3人しか残らない、なんて結末にはしたくない。

完全無欠のハッピーエンドを目指して行かないとな。

まあ、まだ全くどうしたらいいか思いつかないんだけど……

9Sがなんか色々してるらしいし、きっと大丈夫だ。

俺は戦闘モデルだし、そつちで頑張ろう。

また変な事して9Sに怒られたら嫌だし……

ともかく、次は確か2回目のエンゲルス戦だつたはずだし、まずはそこで頑張ろうかな。

戦うだけならあまり考えなくて済むし。

うん。そうだな。それが良い。

そうと決まれば、ちゃつちやとキャンプに帰つて戦闘の準備しないとな。

「……？」「2B、なにか言いましたか？」

「ううん…………9S」

「なんですか？」

「私、頑張る」

「——はい。僕も2Bと同じくらい頑張ります」

よつしや、やつてやるぞー！

機械生命体がなんぼのもんじやーい！

負けないからなー！

あ、あと、それはそれとして

「9Sは私より大変だから、私以上に頑張つて」

「え」